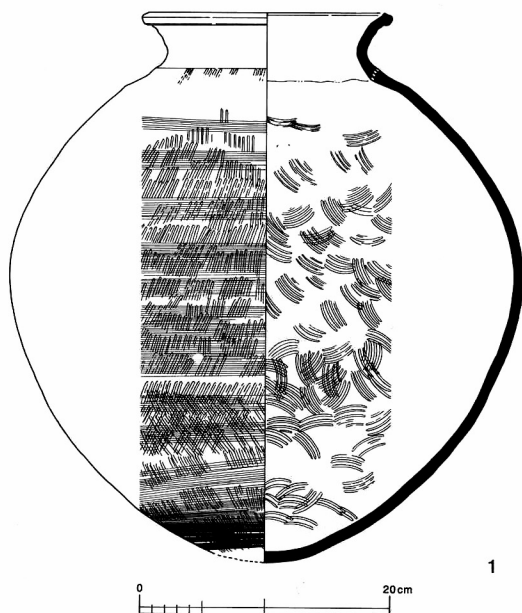


② 土師器

杯 器高3.9cm、口径10.4cmを測り、剝離、磨滅が著しいが、ユビ成形の跡などが見られ、底部には直径3cm程度の黒斑が残っている。

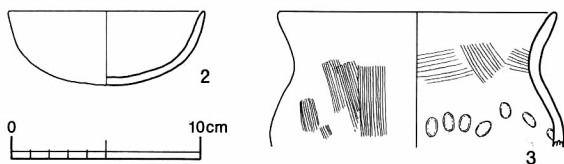
甕 口縁部から肩部にかけて1/4程度しか残っておらず全体に磨滅が著しく調整観察は不明瞭である。肩部は丸く、口縁部は短くやや外反して端部に至っており、ヨコテデの後ヨコ、ナナメのハケ目を施す。体部は内面にユビ成形の跡が残る。また外面にはタテ方向のハケ目を施している。



7. 小結

龍子向イ山4号墳は、龍子向イ山古墳群南支群の最も高い位置に築かれており、三ツ塚山塊の北西へ延びる支尾根の北斜面に立地する。緩斜面ながら1・2号墳の地形よりは急である。古墳からの可視範囲も1・2号墳と同じである

第110図 龍子向イ山4号墳須恵器実測図



第111図 龍子向イ山4号墳土師器実測図

が、高い位置を占めることから、揖西平野などの視界はやや広がっている。

外形は、当初から墳丘は1号墳などに比べると低かったものと思われるが、立地がやや急斜面であることから、流失した盛土も多いものと思われる。墳丘はやや小さく、長径8mのやや楕円形になる円墳である。墳丘は平均1m前後残存しており、最も低い部分から残存高までの比高差は2.5mを測る。墳丘は標高の高い南側は明らかでなく、北側の低い方だけ明確である。北側の低い方は墳丘を旧表土の上に盛っており、旧地形を利用して築き、高い方は削り出している。墳丘構築の方法は、他の古墳と同様で、墓壙を掘り下げ基底石を置いたのち、墳丘築成土の下部層を盛っている。盛土も有機質土と地山客土を交互に使っている。ただ、地山客土1層の量はやや多く厚いようである。墳丘規模が小さい上に墳丘構築の方法が粗雑であり、築造に際しての労力は大きな差があるものと考えられる。

内部主体は横穴式石室で、無袖式の小型の石室である。地形（コンタライン）に平行に築かれている。主軸はN63°Eと東西方向からやや北へ振っている。天井石の全てと側壁・奥壁の上部が欠失している。残存高は1.1mであるが、あと1・2石積まれた1.5m未満の石室高にな

第15表 龍子向イ山4号墳 出土土器観察表

()は復原径

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量(cm)		特徴	備考
					口径	器高		
1	須恵器・甕 (中型甕)	密、黒砂粒含む	良好	(内)灰白色 (外)灰色～ 淡灰褐色	(18.8) 最大径 (41.0)	残存 42.9	全体にヨコナデを行なう。断面により口頸部の粘土のつき目が確認できる。体部外面全体に平行叩きのちかき目を施す。体部内面にはあて具による円弧状に残る叩きの跡が見られる。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめられ先端を内側へややつまみ出している。	体部約1/4程度欠損、口縁約10cm残存。
2	土師器・杯	チャート、長石の砂粒含むが緻密	底の黒斑部分を中心に甘い。他は良好	(外)赤褐色 (内)淡赤褐色	10.4	3.9	ユビ成形のヨコナデを施す。底部に直径3cm程度の黒斑が有る。	剝離・磨滅が著しい。
3	甕	2mm程度の長石など砂粒含むが緻密	良好	内外断面とも 淡橙褐色 ～淡黄褐色	(14.6)	残存 7.1	体部内面にユビ成形の跡が残っている。口縁部のみヨコナデを施す。体部外面、タテのハケ目(8条/cm)、口縁内面にはヨコ・ナナメのハケ目(6～8条/cm)を施す。	全体的に磨滅のため調整不明瞭、口縁～肩部約1/4残存。

ろうかと思われる。全長4.3mで奥壁幅0.9m、開口部幅1.0mを測る。奥壁から4分の3付近までは0.9m幅で延び、そこからやや幅を広げるプランである。石材は粘板岩を主に使い、2石のみ流紋岩を使用している。流紋岩は板状節理を持つもので、小口積みでなく縦積みしているため、安定感に欠ける。裏込めもほとんど使われていないので、なおさら不安定な印象を受ける。石材の広い面を石室内面に向けていることになる。1・3号墳で使われず、4号墳で2石使われていることは、石室の構築に関連するもので、新しい要素と考えられる。粘板岩は基本的に横積みで用いられ、上部は小口積みとして用いられている点は、他の古墳と同じである。石室は両側壁とも標高の低い方へ傾いている。2号墳と同じく天井石を欠くことと裏込めの石の少なさに起因するものと思われる。石室平面プランの幅を広げる部分で、側壁の状況も変化を見せる。開口部付近は小型の石材を使用して粗い積み方であるが、奥壁は基底石に大型の石材を用い目地を通してしている。構築順にも差があり、意識するものがあつたのであろうか。開口部で閉塞施設を検出している。粘板岩の角礫を使って、人頭大の石で閉塞している。石材の大きさに変化は余りないが、積み方や間に入れる土が異なり、1号墳と比較すると簡略化しているようである。

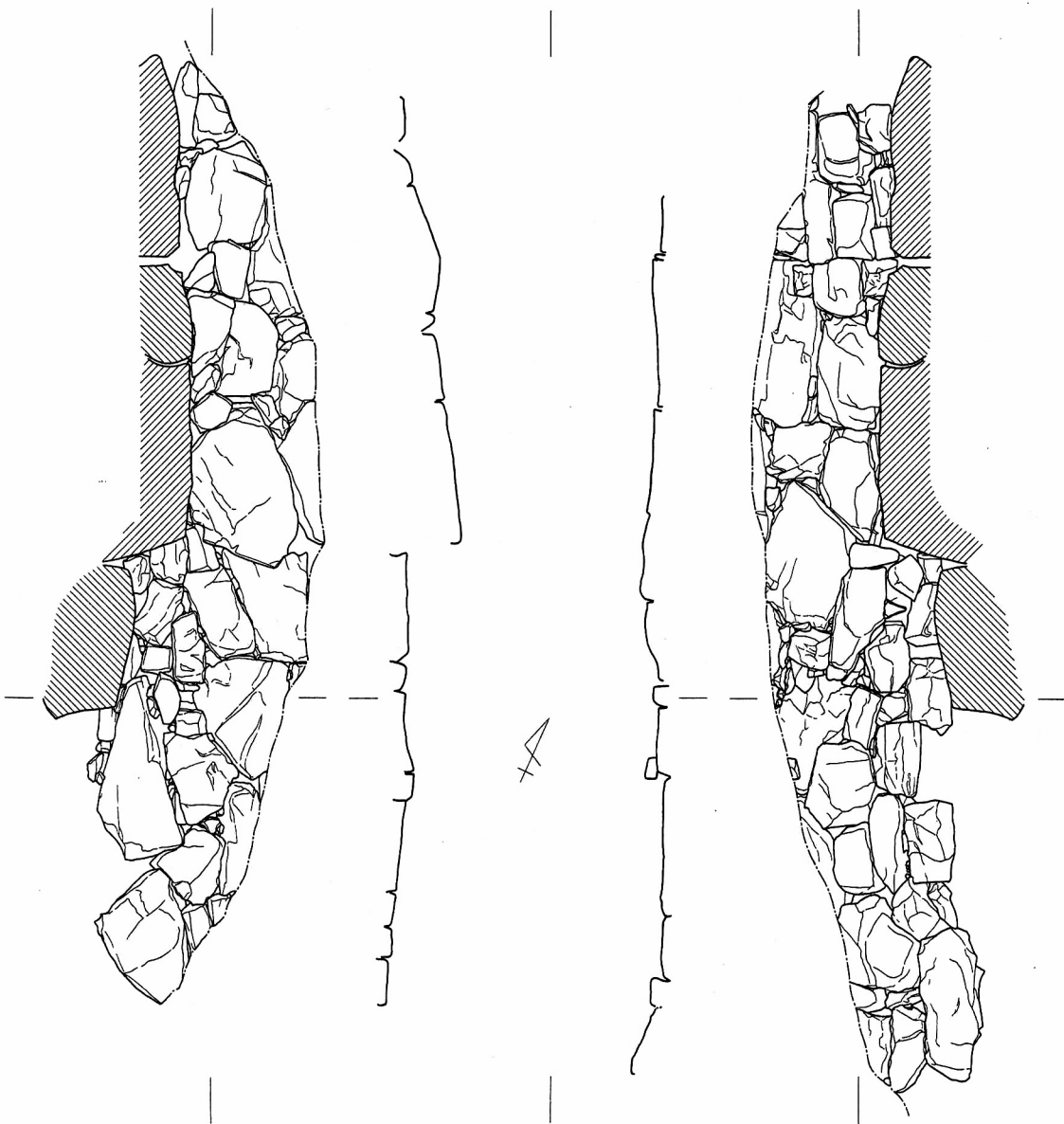
出土遺物は、石室中央で土師器・杯1点と開口部前方で破碎された須恵器大甕と土師器甕が各1点出土している。須恵器甕の時期は大きく新しいとは言えないが、土師器は新しい様相を示している。石室内出土遺物は1点だけであり、新しい要素を持ち用石法から考えて、7世紀代に築造された古墳と考えて良いのではと思われる。調査結果からは、追葬の有無は論議出来ない。

第5節 龍子向イ山5号墳

龍子向イ山5号墳は、北地区の屋根上に存在する横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。今回、山陽自動車道建設予定地内に位置していないため、調査対象とはならなかった。だが、龍子向イ山古墳群中の1古墳としての位置付けを考えるなら、現況での計測は最小限必要な調査であろうと考えたので、横穴式石室の実測調査を実施したものである。当初、地形測量も実施する予定であったが、地権者が遠隔地の方なので了承を得ることが大変なため、地形測量は行わなかった。

1. 位置

北地区の尾根上を東へやや下った平坦面に近い緩斜面上に立地している。三ツ塚から北へ延びる支尾根は、鞍部を持ち支尾根頂上となり、やや急斜面となって北へ派生している。標高60m付近から斜面は緩やかになり尾根幅を広げていく。その尾根幅の広い部分の尾根筋をやや下った部分に占地している。尾根上には径10cm前後の古墳状隆起（6号墳？）が存在する。水



第112図 龍子向イ山5号墳石室 実測図

平距離で25m、垂直距離で2m離れている。同じ北地区内の丘陵裾に存在する3号墳とは水平距離で105m、垂直距離で23m離れている。

尾根上を僅かではあるが、東へ一段下がった位置に築かれていることから、5号墳からの眺望範囲は限られている。龍子向イ山古墳群中でも南地区の3基はもちろんのこと3号墳も眺望関係にない。尾根上の6号墳?のみが見ることが出来る。視界も尾根で遮られるため、北方向に限られる。北東方向は養久山の支尾根によって限られ、南東方向は鳥坂峠によって遮られる。鳥坂古墳群の先端(1号墳)しか見ることが出来ず、養久山墳墓群も埴輪を出土した古墳しか見れない。揖西平野も佐江遺跡などは視野に入り、景雲寺古墳群や的場山などだけ遠望出来る。龍子の現集落は見ることが出来ず、眺望範囲の狭いところに占地した古墳と言えよう。

2. 外形

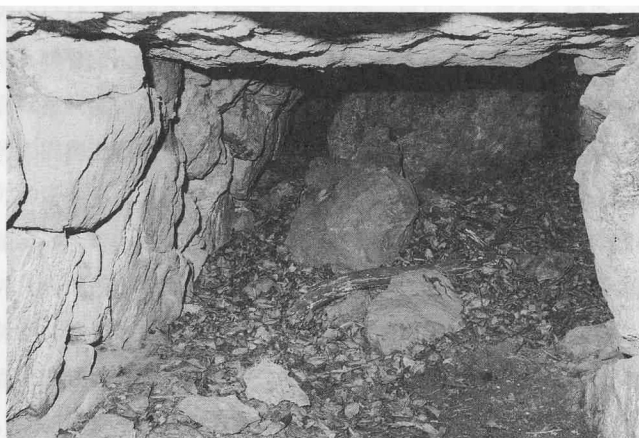
主体部奥壁部分が損壊を受けており、墳頂部から南側へ向けての墳丘は旧態を保っていない。墳丘上部も流失しており、緩斜面上のため墳裾も明らかでない。墳裾部分に土砂が流入しているもので、現状で確認出来る墳丘は高いとは言えない。比較的西半が旧態を示しており、それから12m前後であろうと思われるが、石室規模から考えるとそれ以上になるかもしれない。不定形ながら円墳と考えて良いであろう。墳丘は南東部の最も低い部分から2m余りを測ることが出来る。現状は雑木林である。



第113図 龍子向イ山5号墳全景

3. 横穴式石室

左片袖式の横穴式石室を内部主体とする。玄室奥壁側が墳壊を受けている以外は、保存状態は良好と考えられる。天井石は



第114図 龍子向イ山5号墳横穴式石室

玄室1石、羨道3石が残っている。床面は埋もれているが、残存高1.2mを測る。調査を行ったわけではないので、以下の数値も現状での数値であり、床面の数値ではないので正確なものではない。以下の石室の数値も床面でのものでなく、現状での値である。

奥壁は露出しておらず、玄室の残存長3.6mであるが、ほぼ全長に近いものと思われ、3.7～3.8mとなろう。玄門幅1.3mで袖0.35mで玄室最大幅は1.85mで、奥壁前は幅を狭め1.70m前後になろうと思われる。羨道は残存長3.10mを測り、羨門へ向かって平面プランを広げていくタイプである。特に左側壁は顕著に開いていく。羨門は広く、1.80m前後の数値となるものと思われる。現状観察では羨道は本来の姿で欠失していないものと思われる。石室全長は6.8m余りとなろう。石室の主軸はS25°Wである。

石材は龍子向イ山古墳群の他の古墳や鳥坂4・5号墳、龍子長山古墳群の石室と同じく地山内の粘板岩中のチャートを使用している。壁体構造は、基底石が見られないことから全てとは言えないが、横積みしている。袖石は大型の石材を使っており、袖石上面で目地を通し、玄室は羨道高で目地を通して。天井石を安定するため、石材の形状に合わせて安定を図ったようである。玄室と羨道は0.4mの差がある。袖石上部の石材も大型の石を使用している。石室の壁体構造やプラン・規模など1号墳に近いもので、龍子向イ山古墳群では規模の大きな古墳である。

なお、出土遺物は知られていない。築造時期は石室から考えて1号墳に近い6世紀後半と考えられる。

第5章 特殊遺物の検討

第5章第1節は
公開していません

第2節 龍子向イ山古墳群、および、中井古墳群出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

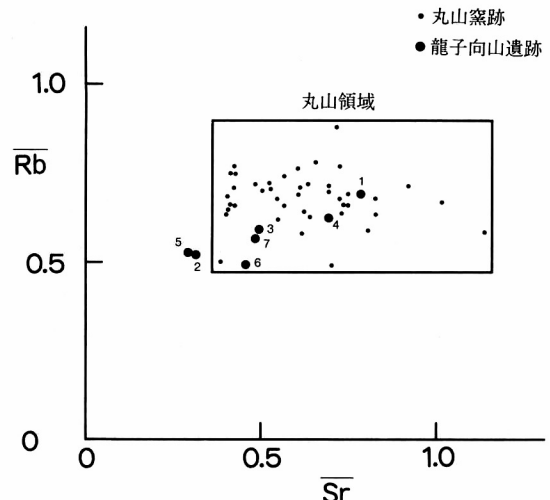
龍子向イ山古墳群、および中井古墳群出土須恵器の胎土分析の結果について報告する。

須恵器片資料は表面を研磨してのち、100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は約15トンの圧力を加えてプレスし、直径20mm、厚さ3mmの錠剤に形成して蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析法でK、Ca、Fe、Rb、Srの5元素を定量した。標準試料には岩石標準試料JG-1を使用した。分析値はJG-1による標準化値で表示された。

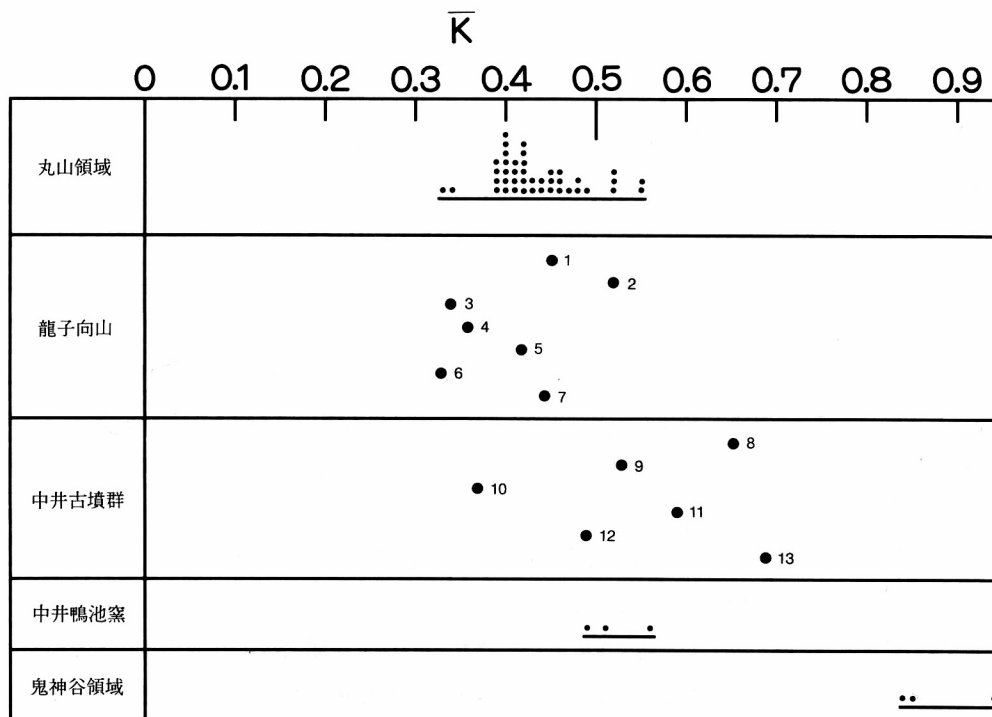
分析値は表1にまとめられている。全分析値をみてFe因子に有効な差違は認められなかった。データ解析には使用しなかった。Fe因子はこのような場合が多い。残る4因子のうち、Rb、Srを両軸にとったRb-Sr分布図がとくに有効な地域差を示すので、まず、Rb-Sr分布図から説明する。

第115図には龍子向イ山古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。この図には、有力な産地の一つと推定される丸山窯跡出土須恵器をプロットしてある。丸山窯跡の須恵器のばらつきは相当大きい。とくに、Sr両のばらつきが大きい。これらの点を全部包含するようにして丸山領域をとった。このようにして設定される分布領域は定量的な意味をもたないが、定性的に産地を推定するにはきわめて有効である。図1にみると、No2、5の2点は丸山領域外にずれて分布するが、他の5点は一応、丸山領域内に分布し、丸山窯産の可能性を示した。これらが丸山窯産であるためには、他の因子でも丸山領域に対応しなければならない。

第116図にはK因子を対比してある。この図には兵庫県内の6世紀代の窯である鬼神谷窯と中井鴨池窯の須恵器の分布領域も示してある。鬼神谷窯の須恵器にはK量が多い。龍子向イ山古墳群の須恵器の中には、鬼神谷領域に対応するものは一点もなく、鬼神谷窯は一応今回分析した須恵器の産地としてははずした方がよいことがわかる。一方、中井鴨池窯の須恵器は3点しかなく、これだけの中井鴨池窯領域を設定する訳にはいかない。恐らくもう少し広げて中井鴨池領域をとるべきであろう。そうすると、龍子向イ山古墳群の7点の須恵器はK因子ではほぼ、中井鴨池領域に対応するとみなけれ



第115図 龍子向イ山古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図



第116図 龍子向イ山古墳群・中井古墳群出土須恵器のK量

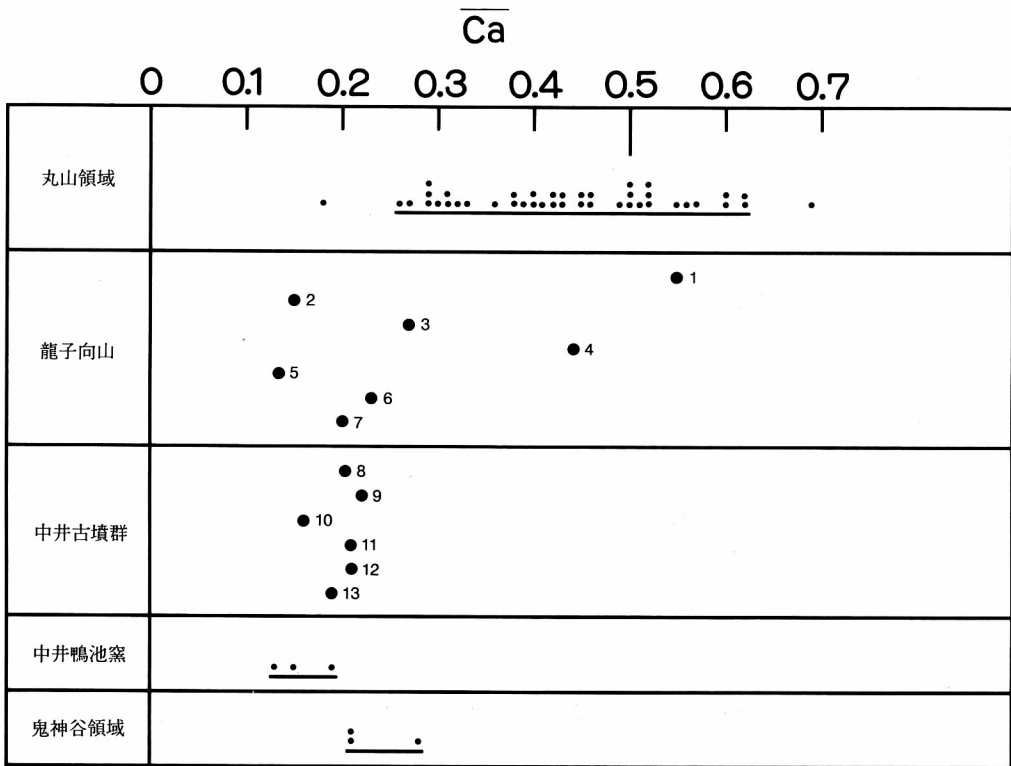
ばならない。

第117図にはCa因子を対比してある。Ca量が多く、丸山領域に対応するのはNo 1 とNo 4 の2点である。No 2、5、6、7の4点は中井鴨池領域に対応する。

以上の結果、全因子で丸山領域に対応するのはNo 1、4でNo 3もその可能性をもつ。しかし、No 2、5、6、7の4点はCa因子で丸山領域には対応せず、むしろ、中井鴨池領域に対応した。

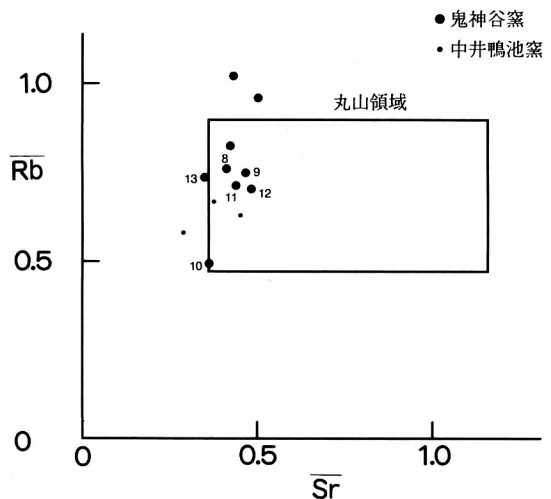
次に、中井古墳群出土須恵器についてみてみよう。第118図には、そのRb-Sr分布図を示す。No 8、9、11、12の4点は一応、丸山領域に入るが、第117図のCa因子では6点とも丸山領域をずれる。したがって、中井古墳群の6点き須恵器の産地としては、一応、丸山窯は除外した方がよい。また、第116図のK因子では鬼神谷領域に対応するものはなく、鬼神谷窯も産地としては適格ではない。むしろ、中井古墳群の近くにある中井鴨池窯が産地として有力であることがわかる。

以上の産地の推定は図面上で行った定性的なものである。もう少し、定量的な産地推定を行うため、クラスター分析を試みた。クラスター分析ではK、Ca、Fe、Rb、Srの5因子の分析値を使って類似度を計算する。この結果はデンドログラムとして第119図に示してある。この



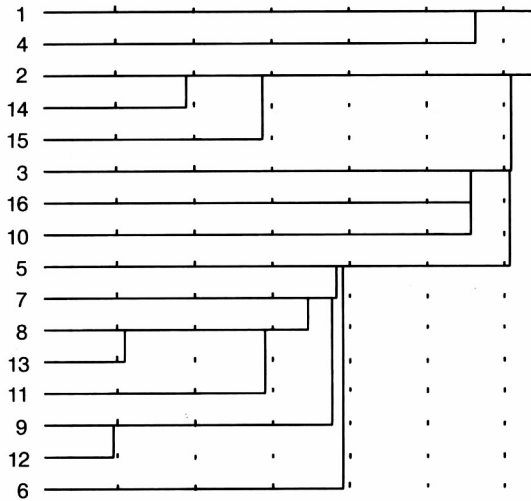
第117図 龍子向イ山古墳群・中井古墳群出土須恵器のCa量

図では縦軸に試料を類似したものから順に並べてある。横軸は5因子を使って、類似度の近いものから順に、逐次、縦線で結んでいく。ただ、この分析法の欠点はどの程度の類似度のものを同一群として選び出せばよいかについては何の判断の基準も与えてくれないことである。そこで、この欠点を補うために、龍子向イ山遺跡、中井古墳群出土須恵器を中井鴨池窯出土須恵器と一緒にクラスター分析し、中井鴨池窯の須恵器に似たもの、似ていないものの2群に分類することにした。そこで、第119図には中



第118図 中井古墳群出土須恵器のRb—Sr分布図

井鴨池窯の須恵器を含めてクラスター分析した結果を示してある。そうすると、横軸のギャップからみて、No 1、4、No 2、14、15、およびNo 3、16、10、5、7、8、13、11、9、12、6の3群に分類してもよさそうに見える。このうち、第二群のNo14、15と第三群のNo16は中



井鴨池窯の須恵器である。つまり、第二・三群の須恵器は中井鴨池窯の須恵器に類似した胎土を持っていることを示す。No 1、4の2点は中井鴨池窯の須恵器胎土に類似していないことも示す。第115図～第117図と対比してもわかるように、この2点は丸山窯産の須恵器と推定される。他のものについては若干の問題があるが、一応、中井鴨池窯産としておく。ただ、中井鴨池窯の須恵器胎土は大阪陶邑産須恵器と似ており、これらは大阪陶邑産である可能性もあるこ

第119図 龍子向イ山古墳群出土須恵器のクラスター分析 とを断っておく。

第16表 龍子向イ山古墳群および中井古墳群出土須恵器の分析値

			試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
龍子向イ山古墳群	甕	1号墳	1	0.454	0.550	1.94	0.688	0.784
	無須壺	〃	2	0.515	0.151	2.89	0.522	0.310
	杯身	〃	3	0.341	0.269	2.43	0.593	0.491
	壺	〃	4	0.356	0.441	2.20	0.631	0.694
	甕	2号墳	5	0.423	0.135	1.80	0.531	0.294
	提瓶	3号墳	6	0.331	0.234	1.87	0.491	0.545
	甕	〃	7	0.445	0.201	1.70	0.571	0.480
中井古墳群	杯	1号墳	8	0.655	0.205	1.56	0.756	0.409
	蓋	〃	9	0.531	0.223	1.95	0.754	0.465
	横瓶	〃	10	0.373	0.158	2.19	0.485	0.359
	杯	2号墳	11	0.592	0.210	1.74	0.710	0.443
	蓋	〃	12	0.489	0.212	1.99	0.695	0.479
中井鴨池窯	甕	〃	13	0.690	0.191	1.62	0.737	0.354
	杯		14	0.490	0.126	3.00	0.582	0.286
	蓋		15	0.506	0.191	2.87	0.629	0.448
	甕		16	0.563	0.148	2.55	0.673	0.373

第6章 龍子I散布地確認調査結果

1. 所在地 龍野市揖西町北山字古川向191
2. 調査日 昭和57年6月16日
3. 調査主体者 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
(担当) 渡辺 昇 村上賢治
4. 調査に至る経過

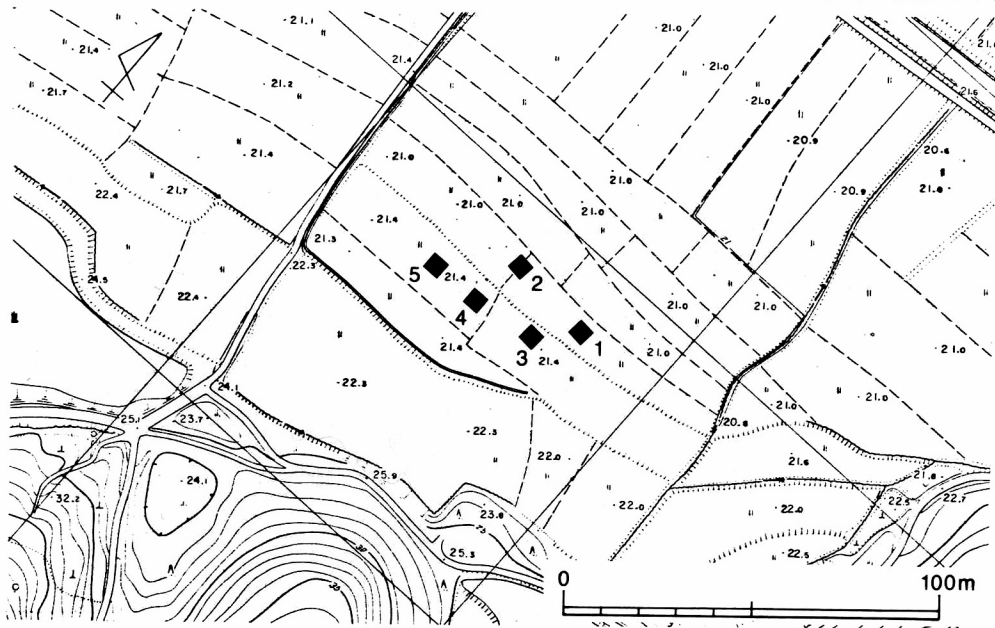
山陽自動車道建設に伴う分布調査によって、当散布地は確認された。路線内から路線外の南方の谷にかけて須恵器を中心とする遺物の採集がなされた。そのため周辺に遺跡の存在する可能性が考えられたので工事に先立って確認調査が必要とされた。分布調査結果に基づいて本年度確認調査を実施した。

5. 調査方法

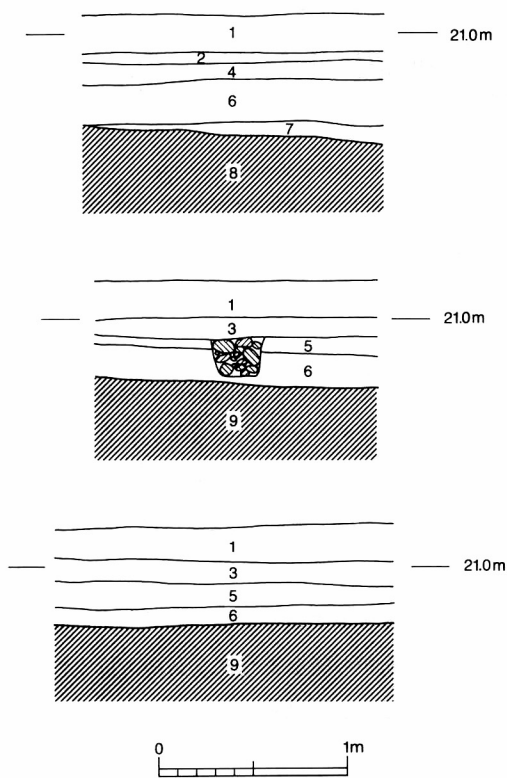
調査対象となった水田の一部は山陽自動車道の工事に関係する土盛りがなされていた。盛土は人力掘削の範囲を越えていたので、重機によって坪掘調査が可能なように5m四方排土作業を実施した。調査は2×2mの坪(グリッド)を基準として5ヶ所設定した。うち2ヶ所は盛土を除去した下面に2×2mの坪を設定した。

6. 調査結果

5ヶ所の坪掘調査の結果、遺構・包含層は確認されなかった。堆積状況は微妙に異なるが、



第120図 龍子I散布地調査地点図



第121図 龍子Ⅰ散布地土層断面図

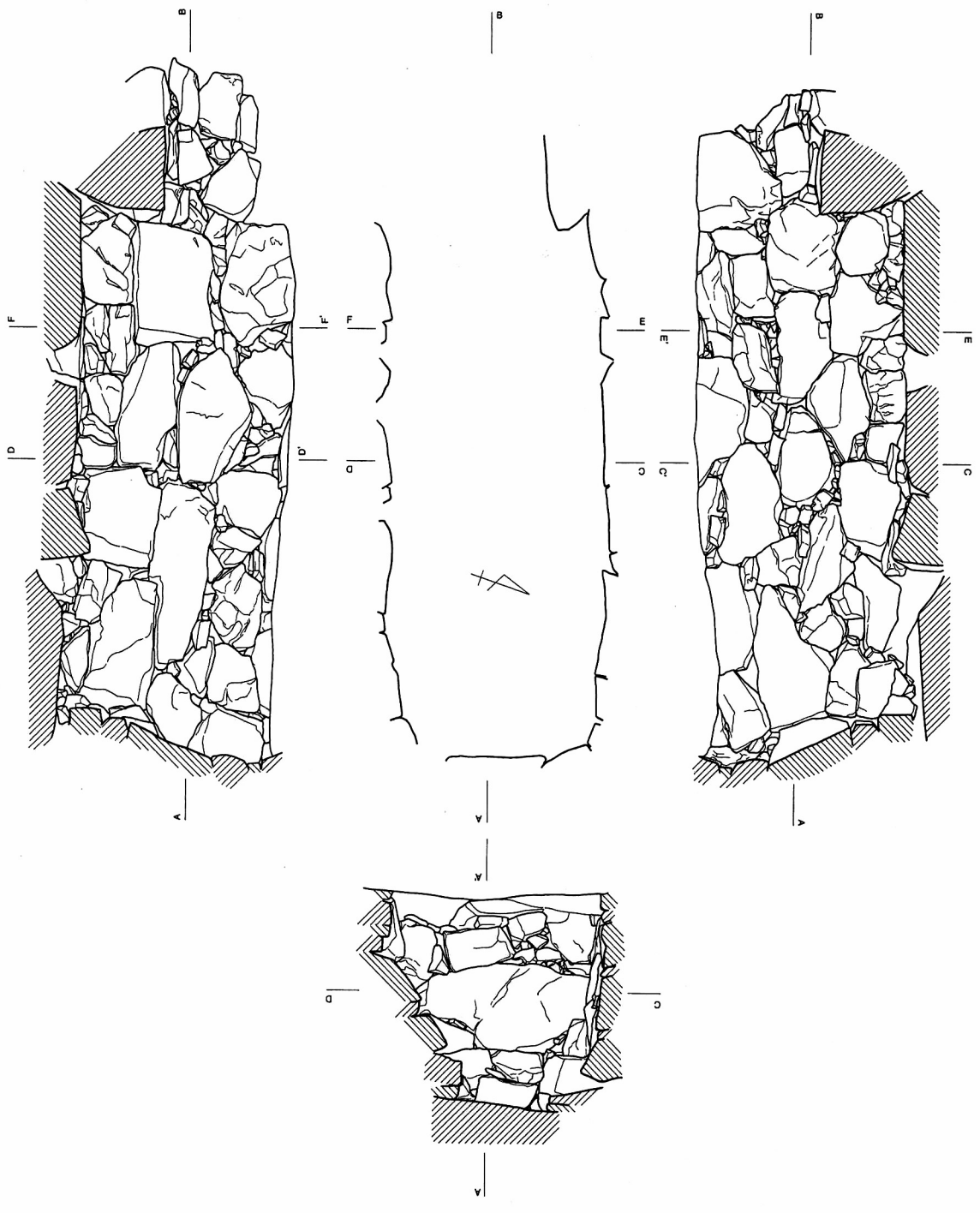
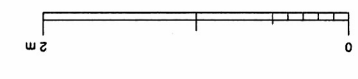
基本的には50~60cmで地山の粘土層になり、上層に暗灰色~灰褐色の粘土層が2・3層あって、床土・耕作土となっている。遺物は各層で見られるが、まばらである。耕作土に最も多く含まれていた。水田下の粘土は当地周辺で以前盛んに焼かれていた瓦用の粘土に適しており、採取されていたようである。調査地内においてもその採土痕跡を見ることが出来た。

遺物は須恵器が大半で他に陶磁器、土師器を数点ずつ出土している。須恵器も6世紀代の甕や7世紀初頭の杯から中世の鉢まで幅広く出土している。耕土に最も多いことから龍子Ⅰ散布地に遺構の存在する可能性は極めて薄いものと思われる。

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 耕土 | 6. 暗灰色粘土 |
| 2. 黄褐色砂レキ土(床土) | 7. 灰色粘土 |
| 3. 黄褐色粘土(床土) | 8. 白色粘土(地山) |
| 4. 灰褐色粘土 | 9. 黄白色粘土(地山) |
| 5. 暗黄褐色粘土 | |



第122図 龍子Ⅰ散布地全景



第123图 蕨久山19号墳 石室実測図

第7章 おわりに

龍子向イ山遺跡・龍子向イ山古墳群の2年度にわたる発掘調査とその後の整理調査によって得られた成果は、数多く挙げられる。

また、同じ時期に同一大字内で調査された龍子長山1号墳や鳥坂古墳群の成果も合わせて考えてみたい。現時点での調査による成果及び問題点を箇条書きに列挙してみると、

1. 龍子向イ山遺跡・龍子向イ山古墳群は、前期古墳として広く知られる龍子三ッ塚古墳から北へ派生した支尾根上ならびにその山腹に立地している。いわゆる三ッ塚山塊の遺跡・古墳として捉えられる。
2. 龍子向イ山遺跡では、弥生時代中期後半の集落跡で、住居跡3棟・柵状遺構2基(列)を検出している。周辺の弥生遺跡とりわけ丘陵に立地する遺跡の消長と軌を一にしている。近接する養久乙城山遺跡や片島遺跡も同様である。
3. 出土遺物も多くなく、丘陵上の遺跡の遺物のため磨滅しているが、龍野市域では尾崎遺跡しか代表的な中期の土器はなかったが、新資料を加えると共に若干の知見もあった。
4. 龍子向イ山遺跡では、古墳時代中期の溝状遺構も確認されている。焼土・炭を伴った溝で鉄斧・鉄剣・刀子・ガラス管玉・ガラス小玉が出土している。遺物の出土状況は木棺直葬の出土状況に似通っているが、埋葬施設は認められなかった。5世紀後半という龍子周辺では類例の少ない時期の資料を加えたことになる。
5. 溝状遺構出土の鉄斧は非常に大形の鍛造鉄斧である。姫路市宮山古墳でも同じタイプの鉄斧が出土しており、その系譜に興味深い点がある。
6. 龍子向イ山古墳群は、5基以上の円墳から成る古墳群で、今のところ全て横穴式石室を内部主体としている。
7. 地形から考えて、南北の2支群に分けることが可能である。間に小さな谷を挟んで、南に1・2・4号墳、北に3・5号墳が立地している。
8. 1・2号墳で確認された火葬骨は、横穴石室内における火葬という極めて特殊な例を与えてくれた。歴史的な問題に広がるかも知れない資料と思われる。特に、1号墳奥壁部の例は、残存度が高く焼成時の状況を推定することが可能である。1号墳と2号墳とでは、骨の残存状態が異なり、焼成状態が異なっているものと考えられる。
9. 南支群では1→2→4号墳と築造順序が考えられ、その石室形態・用石法の変化は好資料となる。
10. 1・4号墳では閉塞石が残っていた。1号墳では閉塞時の墓前祭祀を窺うことが出来る。

11. 3号墳の石室の平面プランは規格性に富んでいる。
12. 3号墳の遺物の出土状況は興味深く、短頸壺のセット関係や製作技法は特徴的である。
13. 出土須恵器の胎土分析の結果、中井鴨池窯跡と那波野丸山窯跡の両方から供給された可能性のあるデータが得られた。
14. 出土鉄器の中にミニチュアかと思われる刀子が出土している。
15. 1号墳では、古墳の再利用が行われている。墳丘外と石室内の両方で行われており時期の異なった再利用が行われているが、共に古墳を意識したものと思われる。墳丘外は、三耳壺・壺で墓前祭祀であろうか。石室内は須恵器椀と土師器甕で、埋葬とは考えられない。
16. 石室再利用の須恵器椀は産地が異なり、需要地の資料として価値あるものである。また、共伴資料として中世の須恵器を見る上に重要である。
17. 三耳壺は、形態は普遍的であるが耳の位置が特徴的である。肩部の対角線の位置に縦耳が付き、直角の位置の下部に1ヶ所縦耳が付く。特殊なタイプの三耳壺で土器の方向（前面観）があるようにも思える。

上述したように、多くの問題点を列挙できる。以下、幾つかの問題点について考えてみて、まとめに変えたい。

第1節 龍子向イ山古墳群周辺の遺跡の消長について

位置と環境の章で記したように龍子向イ山古墳群は揖西平野の南縁丘陵に位置している。揖西平野の南縁と北縁との遺跡の歴史的な差異を認めることが出来る。縄文・弥生前期については資料がほとんどなく、比較資料は提起されていない。弥生中期になると北縁では日山、長尾タイ山、南縁では養久乙城山、龍子向イ山、片島の各遺跡が丘陵上に営まれ始め、平野部には尾崎・佐江などの遺跡が知られている。この時期の集落遺跡では明らかな差を指摘することは困難であるが、地形的に南縁の丘陵の方が遺跡の立地の点で恵まれている。出土遺物の上でも尾崎で分銅形土製品という特殊な遺物が出土しているものの特徴は見出せない。弥生後期になると丘陵上の遺跡は消失し、平野の清水遺跡が大規模な集落として出現する。養久山で代表される墳丘墓は南北いずれにも多数築造されており、揖西平野をはじめとする揖保川中下流域の特徴的な時期と言えよう。この時期は南縁と北縁との大きな差異はない。

しかし、古墳時代になると前期古墳は龍子三ツ塚1号墳、養久山1号墳に代表されるように南縁に限られている。他に龍子三ツ塚2号墳や鳥坂1・2号墳もこの時期の古墳である。竪穴式石室を内部主体とする前期古墳の存在は、揖西平野内での変化を如実に示す資料と考えられる。

次に中期になると、南縁では鳥坂3号墳、片島古墳群が築かれ、北縁では長尾タイ山12号墳、

友ヶ谷丘墳群（西縁）が表われる。5世紀前半代に揖西平野南縁からの拡散が始まり、次代になると鶏塚・宿塚へ引き継がれていく。後期になっても、まず周辺部の養久山41・43号墳や長尾タイ山古墳群、そして北縁の天神山で後期前半の古墳が築かれる。

しかし、後期でも横穴式石室が受容され始めると様相が異なってくる。最後の前方後円墳である西宮山古墳の築造によって、様相の変化は如実に表われてくる。北縁部、すなわち後の律令期山陽道沿いが優勢になってくる。西宮山古墳は穹窿式の初期横穴式石室を内部主体とする最後の前方後円墳で、装飾壺や鏡をはじめ多数の遺物が出土しており、首長墓と考えられる古墳である。それ以後の首長墓の系譜になろうかと考える古墳とは隔絶した位置付けが与えられよう。長尾タイ山1号墳は、石材が取り去られていることから西宮山古墳と同タイプの石室と断定は出来ないが、その平面プランから同タイプの石室の可能性を示唆している。長尾タイ山古墳群は前期末から営まれた古墳群で、この時期に揖西平野西縁に初期横穴式石室が受容されたことになる。西宮山古墳が単独墳で前方後円墳であることになる。西宮山古墳が単独墳で前方後円墳であることと、位置付けの上で大きな開きがあるが、対抗勢力の存在は指摘できる。この時期は、南縁では養久山41・43号墳が6世紀前半に築かれて後、半田山7号墳までの間の古墳は確認されていない。龍子向イ山1号墳石室前方に掻き出されたと思われる一群の中にも、半田山7号墳と同時期の土器が出土している。築造時期は床面の遺物より、やや遡って考えられるかもしれない。

後期になると揖西平野周縁部の丘陵に古墳が構築されるようになる。北縁部には、白鷺山・狐塚・台山・小神・景雲寺・中垣内・新宮東山が、南縁部には半田山・養久山・鳥坂・龍子向イ山・龍子長山が、西縁部には北沢・津原・長尾薬師塚・長尾タイ山・播磨塚が築かれている。各地区によって古墳の密度が異なっている。南縁では半田山2基以上、養久山2基以上、鳥坂2基、龍子向イ山5基、龍子長山2基と、龍子向イ山の5基を最高として2基で構成される古墳群が中心である。西縁の古墳は確認されている限りでは全て単独墳である。長尾タイ山古墳群は中期からの墓域である、9号墳のみが他の横穴式石室と同時期である。主体部が箱式石棺と特殊である。墳丘も低く、前代の葬制を引いている古墳群である。1号墳のみ卓越した存在であるが、後続する9号墳は性格が異なり小型の方墳で、1号墳以前に築かれた古墳と同じタイプとなっている。須恵器甕1点の出土しかなく、9号墳の時期を6世紀後半に決してよいか問題点が残るものと思われる。北縁部の古墳群は、西縁の単独墳、南縁の2～5基と比べると群集した古墳群を形成している。小神25基、中垣内の24基など基数が増大する。古墳の基数が増える以外にも、狐塚、中垣内1号墳の大型石室が構築されている。ともに全長9.8mを測る両袖式石室である。南縁では無袖の鳥坂5号墳が8.2mを測る程度で、石室規模の差は歴然としている。石室面積・空間にすれば、さらにその数値は開いている。2基の大型石室に匹敵するのは同じ山陽道沿いの中井古墳群である。石室プランは崩れた特徴的な片袖式石室で2号墳

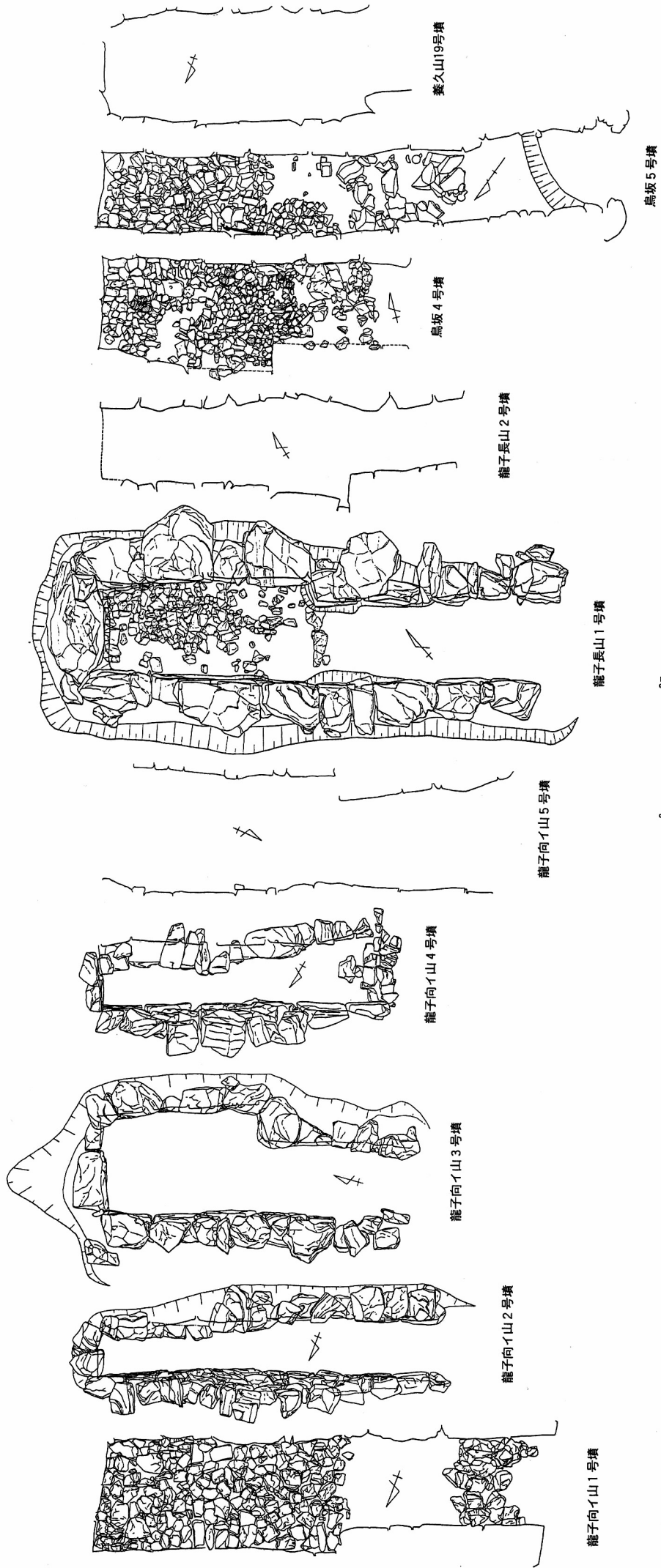
は11.1mを測る。後期になると古墳の量・質ともに北縁の優位性は歴然としており、律令期寺院などへ引き継がれるものと思われる。6世紀中葉の横穴式石室受容を契機として、北縁部が中心となっていくようである。この状況の中で龍子向イ山古墳群は構築されているが、1・2号墳は石室内の火葬とう特赦な葬法を用いている。しかし、全ての古墳で施工されているわけではなく、1・2号墳でも当初は普遍的な埋葬が行われ、一時期火葬に臥したのち、1号墳のみはその上面は土葬に戻っている。龍子向イ山を奥律城とする集団の一時期の数人（遺構からは3人）のみを火葬にしたという特殊な状況である。短絡的には、火葬の風習を持つ人物（集団）が存在したと考えるが推定の域を出ず、今後の問題となろう。鳥坂4号墳の通有の石室ながら多種多数の玉類の保有とともに、龍子に居住した集団を想像する糸口になろうかと思われる。

第2節 龍子向イ山古墳群の特質について

龍野市をはじめとする揖保川町・新宮町・御津町・太子町そして姫路市の一部・相生市の一部の旧揖保郡の地域（換言すれば揖保川中下流域）は、墳丘墓の多いことで知られるが特徴的な後期古墳も数多く確認されている。横穴式石室を内部主体とする古墳に限って概観しても同様で興味深いものがある。龍野市域で調査された古墳は、西宮山古墳を最初として、龍子向イ山古墳群（4基）、龍子長山1号墳、中井1・2号墳、鳥坂4号墳、津原古墳と数少ない。実測図が作成公開されている古墳も狐塚古墳・中垣内1号墳など5基の図面があるにすぎない。揖保郡全域に広げても40数基の横穴式石室の実測図があるだけである。総数700基を越える横穴式石室を主体部とする古墳が確認されている中で、実測図のある割合は僅少と言わざるを得ない。また、同じ時期に同一大字内で調査された龍子長山1号墳や鳥坂古墳群の成果も合わせて考えてみたい。

揖保川中下流域の横穴式石室の受容は、穹窿式石室を持つ古墳から始まる。西宮山・長尾タイ山1号墳（龍野市）、姥塚（新宮町）、小丸山（御津町）、馬場前山1号墳（揖保川町）、丁山頂・丁3-1号墳・山戸0-5号墳（姫路市）がこのタイプの古墳であり、集中せず分散して築かれている。同種の石室ではあるが、若干の時期差は考慮すべきであろう。墳形は西宮山・小丸山が前方後円墳で他の墳形（円墳）と異なっている。西宮山と小丸山の両古墳が最も比較されるべき好対照の古墳である。西宮山古墳は全長8.8mの左片袖式石室である。玄室は幅3.4m、長さ3.8mの正方形に近いプランで大きく持ち送っている。穹窿式石室構築時においても、地域によっては横穴式石室以外の主体部を有している。

古墳群中の穹窿式石室は群内に継続して横穴式石室を築いている。逆説的に換言すると、群内の最初に構築された古墳が穹窿式石室を主体とする古墳であると言える。西宮山と小丸山は前方後円墳で単独墳的（小丸山古墳横の縦穴式石室を前代の古墳と考えている）に存在し、長



第124図 三ツ塚山嶽の石室

第17表 龍子向イ山古墳群周辺の石室計測表 (単位m)

	形態	全長	奥壁幅	羨門開口部幅	玄室長	玄門幅	玄室高	袖幅	羨道長	羨道高
龍子向イ山 1号墳	右片袖	6.8	1.6	1.4	3.75	1.45	2.1	0.4	3.05	1.6
2号墳	無袖	5.5	0.8	0.8	—	—	(1.4)	—	—	—
3号墳	左片袖	4.8	1.5	1.0	2.4	1.1	(0.8)	0.5	2.4	(1.0)
4号墳	無袖	4.0	0.9	1.0	—	—	(1.0)	—	—	—
5号墳	左片袖	(6.8)	1.7	1.8	(3.6)	1.3	(1.2)	0.35	(3.1)	(0.9)
龍子長山 1号墳	左片袖	6.5	1.4	1.3	3.3	1.25	(1.4)	0.35	3.2	(1.1)
2号墳	右片袖	6(推定)	1.1(推定)	0.98	3.79	1.45	1.5(推定)	0.4	2.18	(0.5)
鳥坂 4号墳	右片袖	4.5	1.3	1.1	2.6	1.1	(0.7)	0.4	1.9	(0.3)
5号墳	無袖	8.2	1.15	1.15	—	—	(1.7)	—	—	—

高さの()の数値は残存高

尾タイ山1号墳は群内で終わり段階に築かれている古墳で、他の古墳と逆である。

やや遅れて揖西平野も含めて横穴式石室が構築されるようになる。龍子向イ山古墳群をはじめ小神・中垣内など大半の古墳群が造墓活動を開始する。出土遺物からでは、西宮山の追葬時期と諸古墳の構築開始時期とほぼ同時期である。龍子向イ山1号墳石室外の遺物で古相を示す資料が含まれている。

龍子向イ山古墳群は横穴式石室を内部主体とする円墳5基で構成される古墳群である。揖西平野の同時期も、時期不明な長尾タイ山9号墳を除いて全て横穴式石室を内部主体としている。また、全古墳とも揖西平野周辺部で採取される石材を使って石室を構築している。揖西平野内での石材の移動は明らかに認められる。西縁山塊の竹原～大陣原で採取される流紋岩が幾つかの古墳で使用されている。龍子向イ山でも3・4号墳で確認されている。3号墳は棺材と思われる石材に、4号墳は奥壁・側壁の一部に使われている。流紋岩は前期の鳥坂1・2号墳や龍子三ツ塚古墳の時期から利用されている。龍子向イ山の石室は流紋岩の数石を除いて、すべて粘板岩中のチャートが使われている。

石室の規模は、第17表の通りである。1・5号墳が大きく、3号墳が次いでいる。石室の長さでは4号墳が小さいが、石室の床面積では2号墳の値が最も小さい。最も大きい1号墳でも6㎡と狭小である。床面積においては1号墳より5号墳の方が上回っている可能性が高い。古墳の立地条件・開口方向は異なっており、別の系譜を考えた方が良いかもしれない。龍子向イ山の調査段階では4基の比較しか行わなかったため、1号墳が傑出した存在と考えがちであっ

た。しかし、周辺の古墳との比較を行ってみると、平均的規模の石室であることが明らかとなった。龍子向イ山古墳群中では大きな石室であるが、一般的規模の石室と捉えてよいと思われる。龍子長山1・2号墳も1号墳とほぼ同規模であり、1号墳も通有の石室と考えて大過ないものと思われる。2・4号墳の無袖の石室を新しい石室と考えられないかとも思ったが、鳥坂5号墳があることから一言で時期差は言えないようである。2・4号墳は用石法から新しい要素を感じるが、鳥坂5号墳は新しい様相を示しておらず、平面タイプからだけでは議論できない。

龍子向イ山古墳群をはじめ揖西平野の後期古墳群は横穴式石室を埋葬主体とする明らかな墳丘差を持たない円墳で構成された古墳群である。同様のことは、近隣でも大住寺・内山・丁・木虎谷など代表的古墳群に見られ、東播磨・但馬南部・丹波・摂津の多くの古墳群にも見られる普遍的な特徴である。このような特徴を有する古墳群の背景として、この時期の政治的再編成によるものではと考えられている。『擬制的同族集団』と呼ばれる新しい氏族の編入などによって政治的紐帯を強くし、一つの集団へと引き込んだものと思われる。龍子向イ山をはじめ周辺古墳群も同様の性格が与えられよう。龍子向イ山1・2号墳の新しい要素を持った葬制などは、この傍証の一つになろうかと考えている。ただ、他の例から推定したり、後世の史料から氏族の推定などの作業は無謀かと思われるので、問題提起に止めておきたい。北地区の溝状遺構の遺物がなければ、台頭勢力や新しい氏族の可能性を考え易いが、龍子三ツ塚との間隙を埋める資料の存在から断定しがたくなった。今後、同種の例があれば再考せねばならないが、現時点では龍子向イ山古墳群の被葬者に新しい要素を感じている。北縁勢力に対する旧来からの南縁勢力ではなく、新勢力の導入の可能性が高いものと推敲している。

第3節 龍子向イ山古墳群の出土遺物について

4基の古墳の調査の出土遺物は多数であるが、古墳によって出土遺物の内容には大きな差異を持っている。出土遺物の内容は、第18表の一覧表の通りである。石室床面は、4基ともほぼ完存しているものと思われるが、副葬品が全て残されていたかどうかは不明である。ただ、大きな差が表われてはいないであろう。石室前方の遺物については流失した可能性が十分に考えられる。

確認されている出土総数は213点である。内訳は1号墳138点、2号墳29点、3号墳43点、4号墳3点で、1号墳は出土総数の3分の2近くを出土しており、内容的にも凌駕している。遺物の種類で分けると土器110点（須恵器105点、土師器5点）、鉄器89点、耳環14点で、青銅製品はもちろんのこと玉類は1点も出土していない。同時期の同規模の鳥坂4号墳が多数多様の玉を保有していることと対照的である。遺物総量の大半が1号墳であることから良好な比較とは言えないが、遺物内容の特徴を記すと、①全体の3分の2の遺物は1号墳が保有している。

第18表 龍子向イ山古墳群出土遺物一覧表

	須 惠 器							土 師 器			鉄 器				計	
	杯身	杯蓋	高杯	平瓶	提瓶	壺	甕	杯	壺	甕	鎌	刀子	釘	馬具		耳環
1号墳	15	24	9	2	5	17	5		1		31	5		15	9	138
2号墳	3		2	1		3	1			1		1	12		5	29
3号墳		8 (短頸壺の蓋)			1	8				1	22	3				43
4号墳							1	1		1						3
小 計	18	32	11	3	6	28	7	1	1	3	53	9	12	15	14	
合 計	105							5			89				14	213

②玉類、青銅製品は1点もない。③4基とも土師器を保有している。④馬具は1号墳だけ持っている。⑤武器（鎌）は1・3号墳だけ出土。⑥釘は2号墳に限られる。⑦耳環は1・2号墳に限られる。⑧4号墳は石室内から須恵器が出土していない。⑨2号墳は平瓶のみで提瓶を有さない。などが列挙出来る。出土遺物の内容を見ても1・3号墳の床面出土土器は同時期であるが、1号墳の石室外に出された土器に古相を示すもの（1・25など）が含まれており、用石法などからも1号墳が最初に構築されたものと思われる。次の時期（TK-43期）が1・3号墳床面と2号墳石室外の遺物である。1・2号墳の間は1世代程度であることが窺われ、連綿と共同体的家族墓として埋葬が行われていたであろう。2号墳床面は新しい様相を示す杯身・平瓶が出土しており、時期差は明らかである。4号墳床面出土土師器は時期幅のある杯であることから、時期を細かく決められないが、用石法が異っており、2号墳より新しい時期を考えて良いものと思われる。1号墳の火葬を行った面（第2面）では平瓶上半部に炭を詰めて置かれており、1号墳第2面は新しいことが理解されよう、2号墳床面の杯(3)はさらに新しい型式を示している。これから4小期に分けることが可能である。

南地区において、1→2→4号墳の築造順序が考えられる。出土遺物量も減少しており、1号墳と2号墳の間に大きな変化が看取される。しかし、3基とも石室前方から遺物が出土しており、墓前祭祀と考えられる行為を行っている。3号墳は石室前方が開墾によって残っていないことから不明である。鳥坂4・5号墳でも同様の出土状況が見られ、龍子をはじめとして、周辺では墓前祭祀を多く行っている点で共通している。ただ、石室前方に古い土器が含まれていることが追葬時の掻き出しの可能性も考えられる。

1・3号墳と2号墳の間に画期はあるが、1・2号墳だけは規模の上などから当然と言えよ

うが、2・3号墳間の大きな違いは葬法の違いと地区の異なることが挙げられる。南地区の被葬者が耳環を好んで副葬したか、火葬によって埋葬された氏族の特徴と考えるのであろうか。

出土遺物の中で興味を引く資料が幾つか挙げられる。1号墳から小型の壺が2点(50・51)出土している。ミニチュアと呼んでも問題ないもので、装飾壺などの存在の可能性の余地を残している。前節で記述したように、あくまで大型石室ではないが、揖西平野南縁では最多数の5基で構成される古墳群の中心的存在は肯定される。Aクラスの古墳ではないが、新勢力の首長墓としての位置付けは可能で、装飾壺の保有の可能性を求めたい。

次に、3号墳の埋葬用の土器がある。蓋つきの短頸壺が7組出土しており、蓋端部が短頸壺肩部に付着していることや、焼成時の灰被りの状態からセット関係は明瞭である。短頸壺は扁平なプロポーションを呈しているものが多く、特別に焼成したのではないかと思われる。2点の事実から平易な言い方をすれば、注文生産的な副葬用の特別品でないかと考えられる遺物である。土器の胎土分析の結果からも同じ揖保郡内の丸山窯跡で焼成されたものと思われ、需給関係も興味深い点である。

2号墳からは小型の刀子が1点出土している。実用とは考えられず、ミニチュアと考えられる模造品である。近くの龍子長山1号墳からも2点出土している。長く見ても全長8cmの刀子である。刃は一応設けているが、小型刀子の類例を知らないことから、模造品の可能性を考えておく。2号墳以外の古墳が保有せず、2号墳と龍子長山1号墳のみが保有する意義は何か今後の問題点としたい。石室規模や葬法の違いは歴然としているが、同じ小型刀子を有している理由を説明出来ない。石室の再利用を行った要因となる群内の手近な大型石室という点では、1号墳との類似性の方が強いと思われる。

龍子向イ山の調査は昭和57・59年の2年次に実施した。両年度とも発掘調査件数の多い年で、ほぼ1年間発掘調査に従事した年であった。昭和59年度の調査は結果的に57年度調査の補足調査に近い結果となったが、それなりの成果を納めた。半田山墳墓群や中井鴨池窯跡と同じ山陽自動車道関係の調査期間の間に何とか調査を行った。龍子向イ山1号墳を道路法面内とは言え、一応最小限の保存を図れたことは調査員として喜ばしいことであった。

昭和57年度は、それまで22人であった埋蔵文化財専門職員が30名に増加された年で、担当者もそれに伴って新たな気持ちで実施し、印象深い調査となった。しかし新たな問題意識も個々に芽生え、その後の発掘・整理調査に追われたことから、十分遺跡の検討・追求が出来なかった。それは当然調査担当者として力不足によるものであるか、それらを補い「龍子向イ山」の性格・問題点を言求、活用して戴けることを願うものである。同じ時期に大字龍子という同地域で、龍子向イ山、龍子長山1号墳、鳥坂古墳群の3地点の発掘調査を実施したにもかかわらず、問題追求出来なかったことを反省し、今後活用を図れるよう努めたいと思っている。

圖 版



龍子向イ山空中写真（北東から）



龍子向イ山空中写真（北から）



龍子向イ山遠景（北から）



龍子向イ山中写真（北西から）



遺物出土状態



墳丘断面



火葬骨検出状況



火葬骨検出状況



横穴式石室全景（火葬骨検出状況）



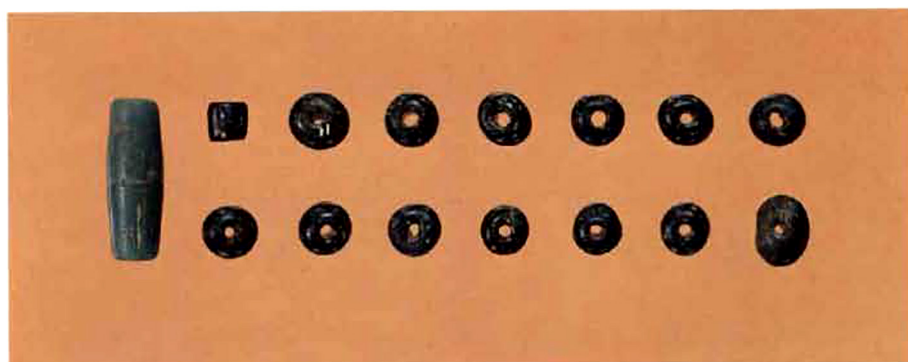
墳丘断面



横穴式石室全景



墳丘断面



龍子向イ山遺跡溝状遺構出土土



龍子向イ山1号墳出土耳環



龍子向イ山周辺空中写真



龍子向イ山空中写真（南から）



龍子向イ山空中写真（南西から）



龍子向い山空中写真（南西から）



龍子向い山空中写真（北東から）



龍子向イ山空中写真（東から）



龍子向イ山空中写真（北から）



龍子向イ山遺跡全景（南西から）



龍子向イ山遺跡全景（北から）



1・2号住居跡



1・2号住居跡



1・2号住居跡土層断面



井跡



棚状遺構 2



棚状遺構 2



鉄斧・鉄剣出土状況



鉄斧・鉄剣出土状況



全景



ガラス小玉出土土城



南地区全景



南地区全景



調査前（南から）



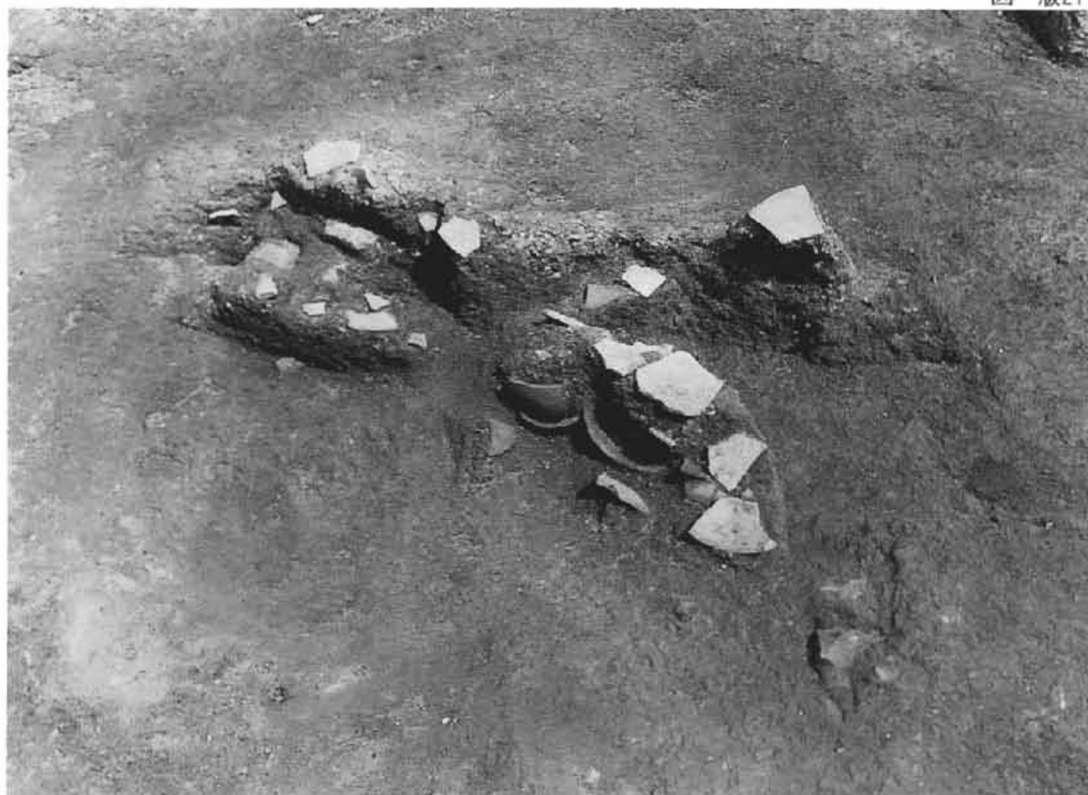
調査前（西から）



列石（北から）



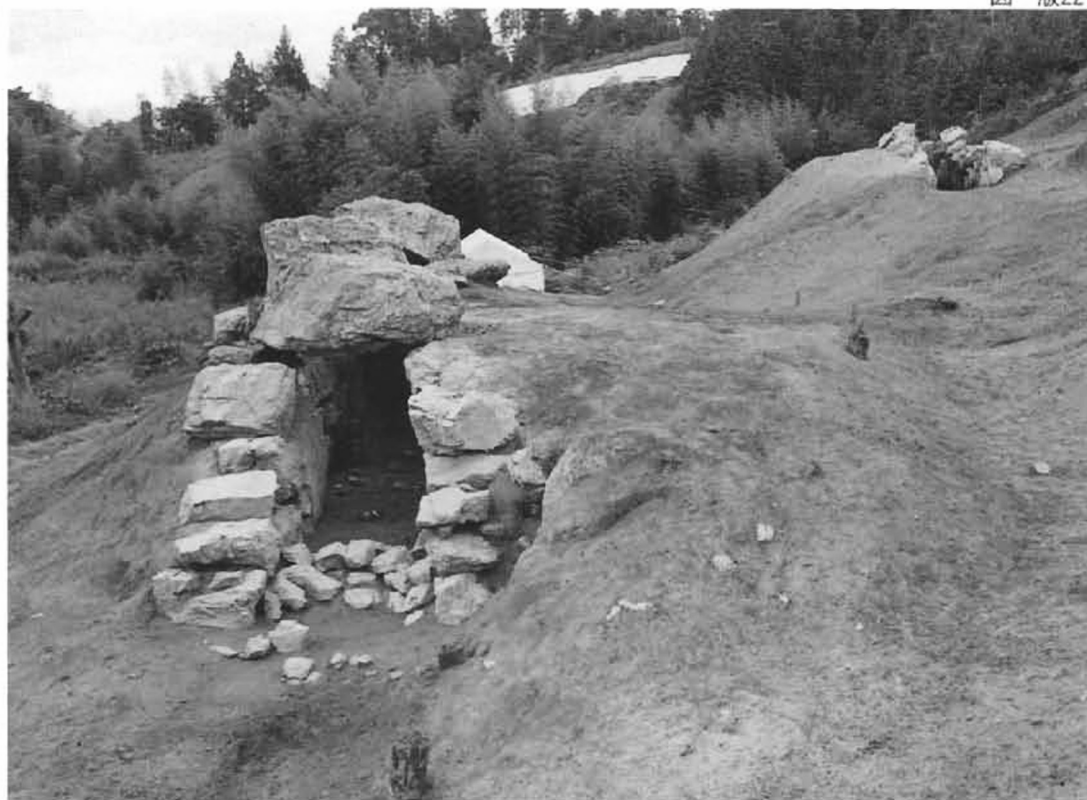
周溝状落ち込み（西から）



石室前遺物出土状況



再利用時遺物出土状況（西から）



墳丘全景（西から、右奥は2号墳）



追葬面遺物出土状況（西から）



追葬面遺物出土状況



追葬面遺物出土状況



敷石面遺物出土状況



敷石面完掘状況 (左奥は人骨)



羨道部遺物出土状況



敷石面と閉塞石（東から）



敷石面遺物出土状況



敷石面遺物出土状況



調査前 全景 (西から)



全景



遺物出土状態



遺物出土状況



石室全景



石室全景



土層堆積状況



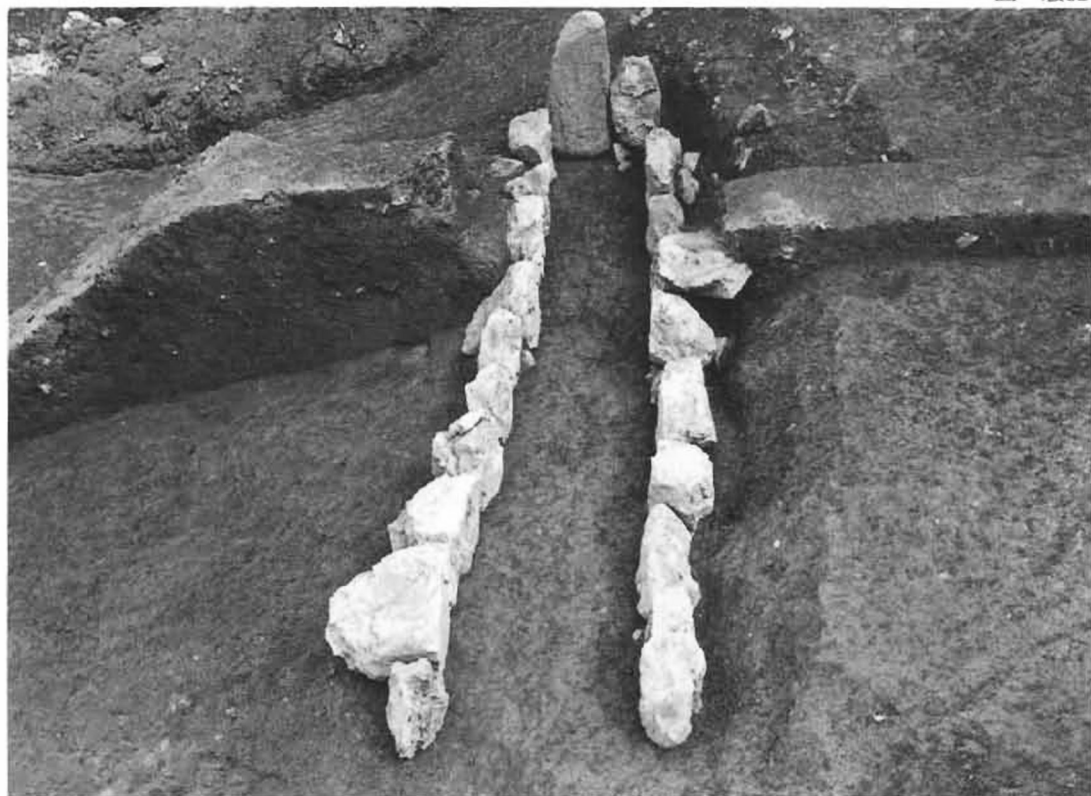
墳丘土層断面



石室全景



北側壁



石室基底石全景



石室基底石全景



調査前全景



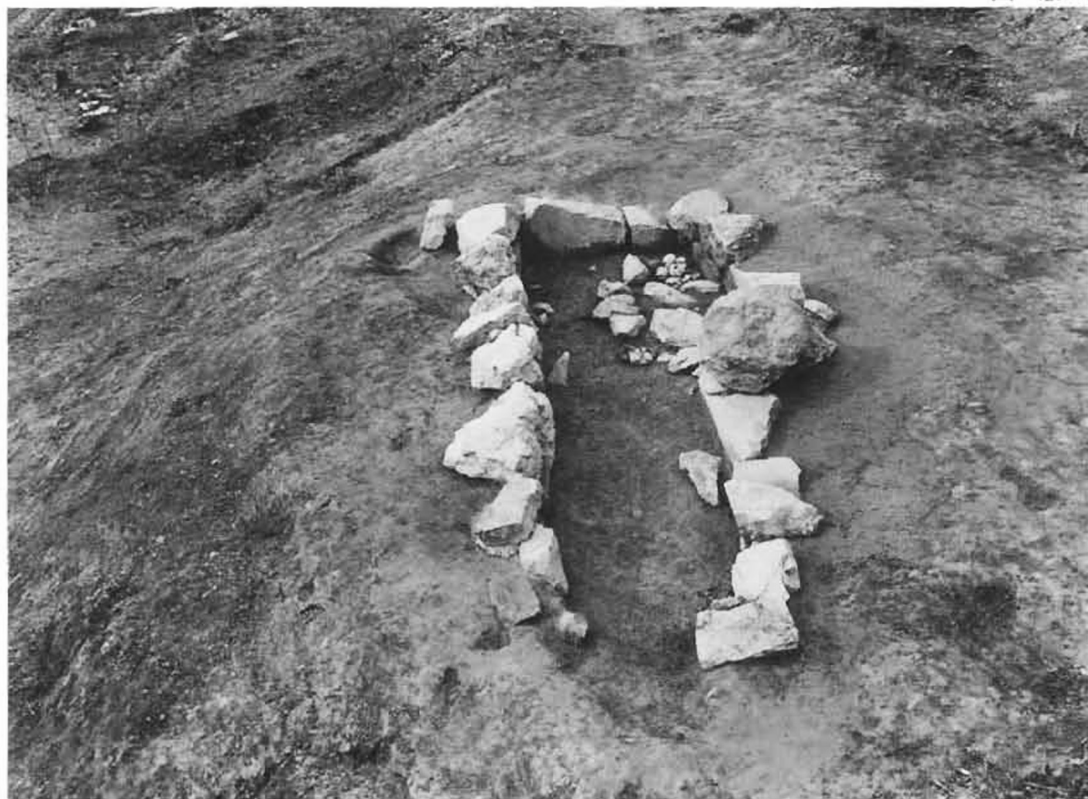
石材落石状況



遺物出土状態



遺物出土状態



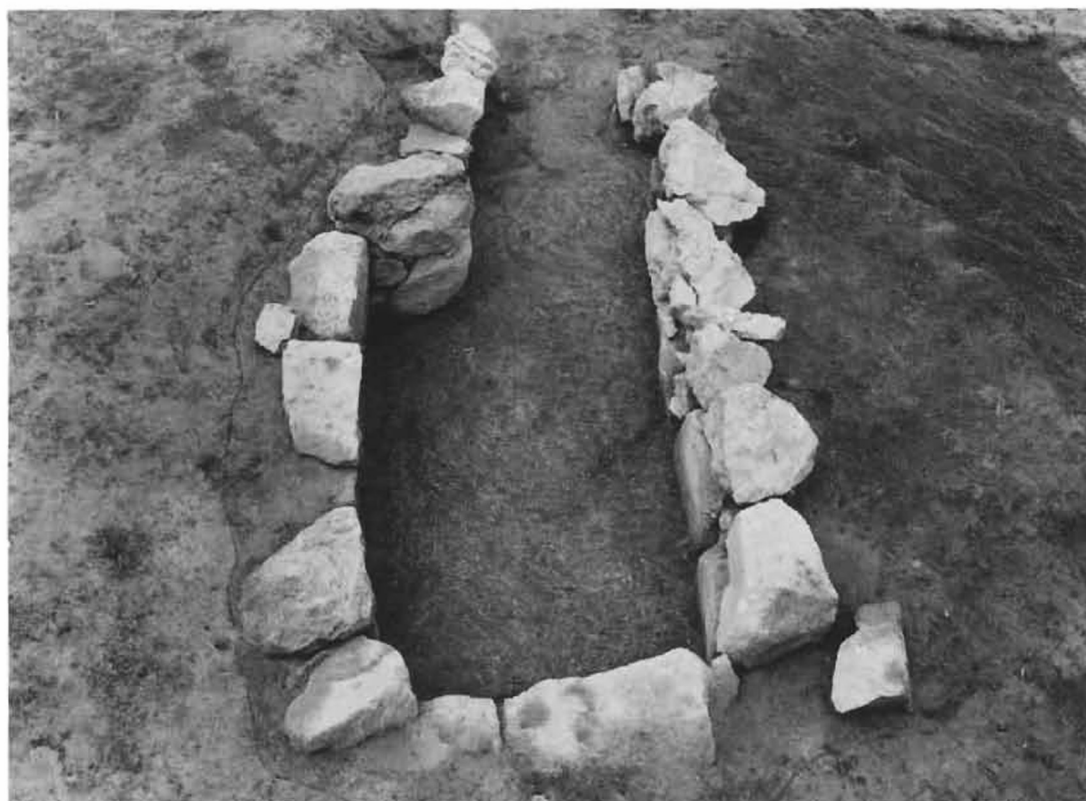
石室全景



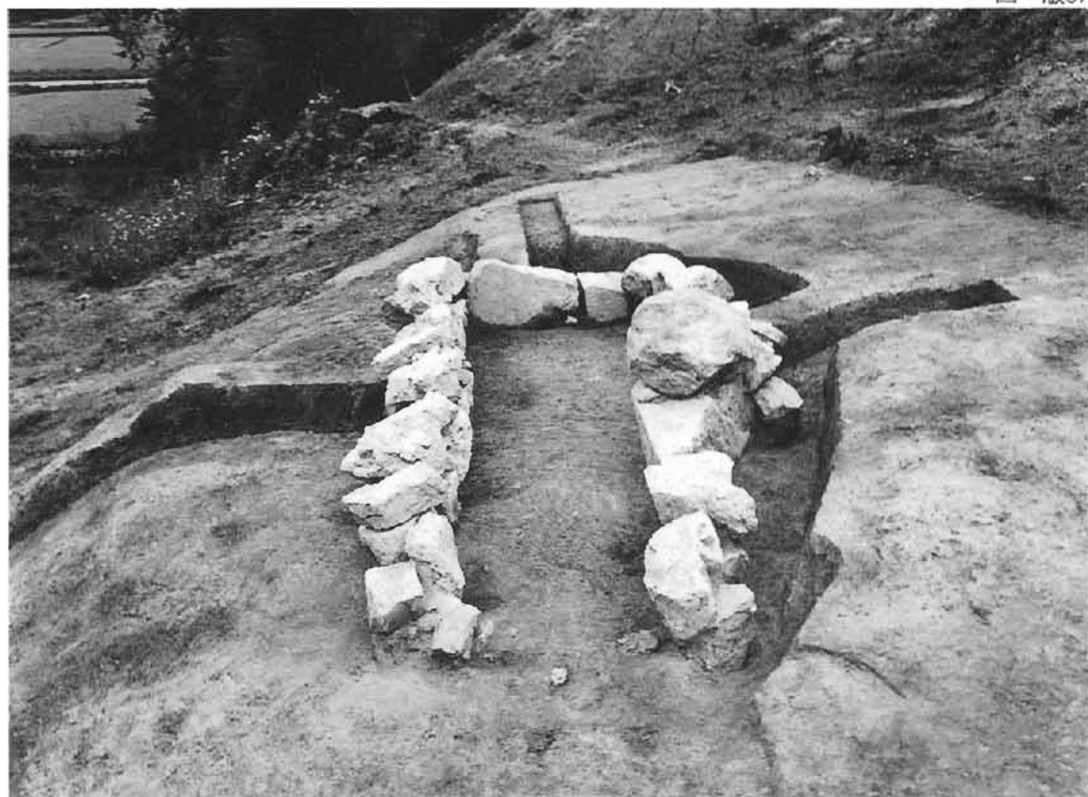
石室全景



石室全景



石室全景



墳丘土層断面



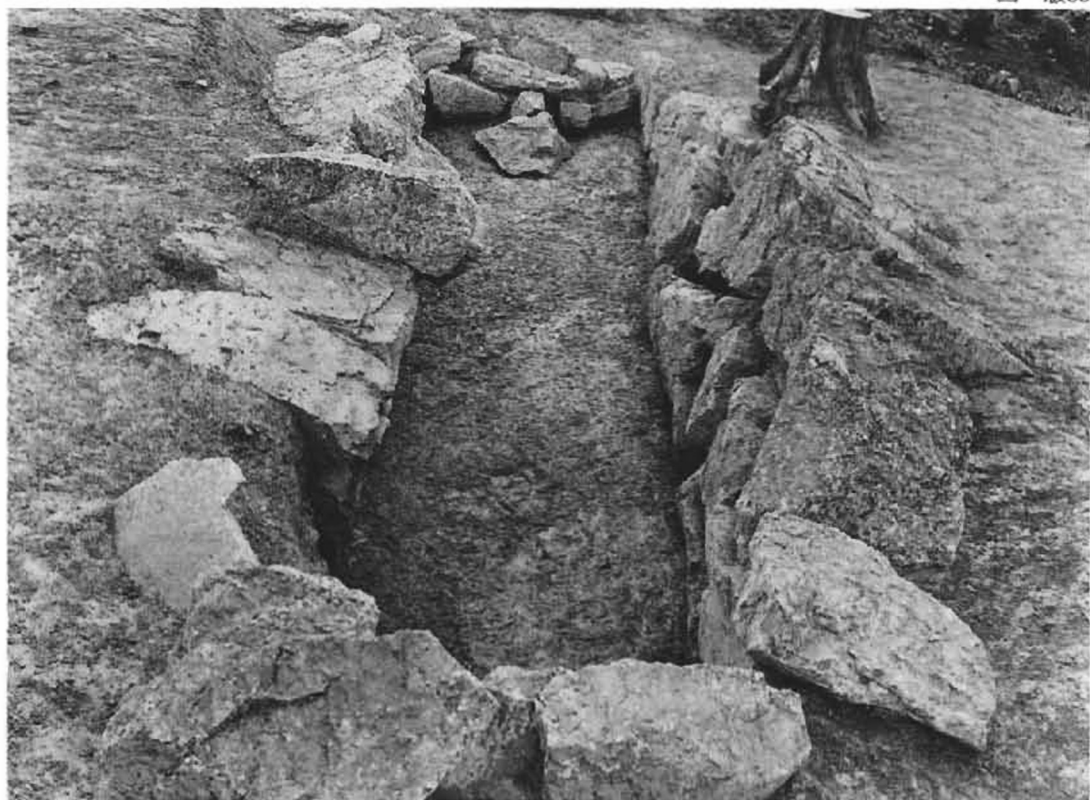
墳丘土層断面



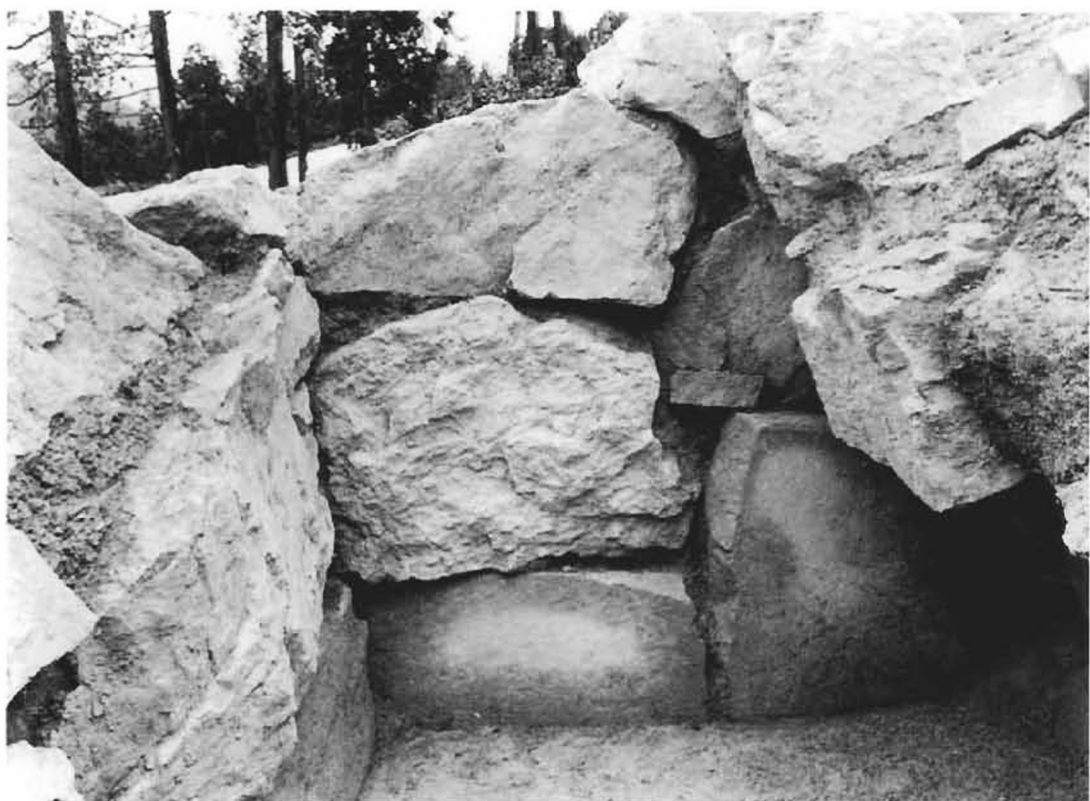
古墳全景



古墳全景



石室全景



奥壁



閉塞状況



石室基底石全景



墳丘土層断面



墳丘土層断面



4号墳



3号墳

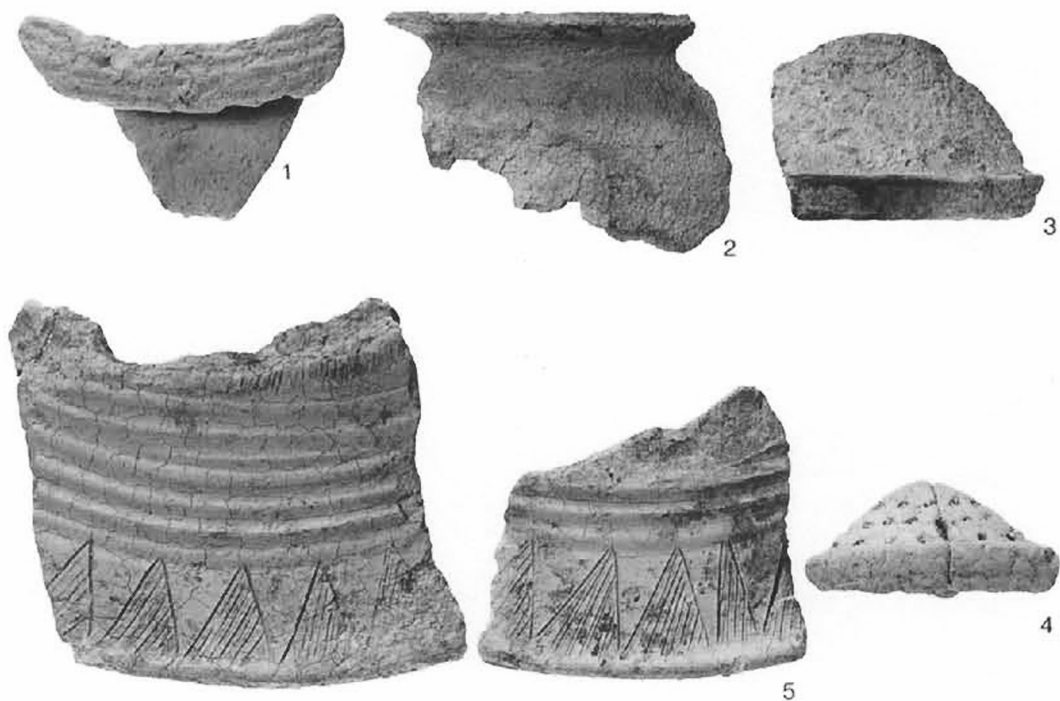


2号墳

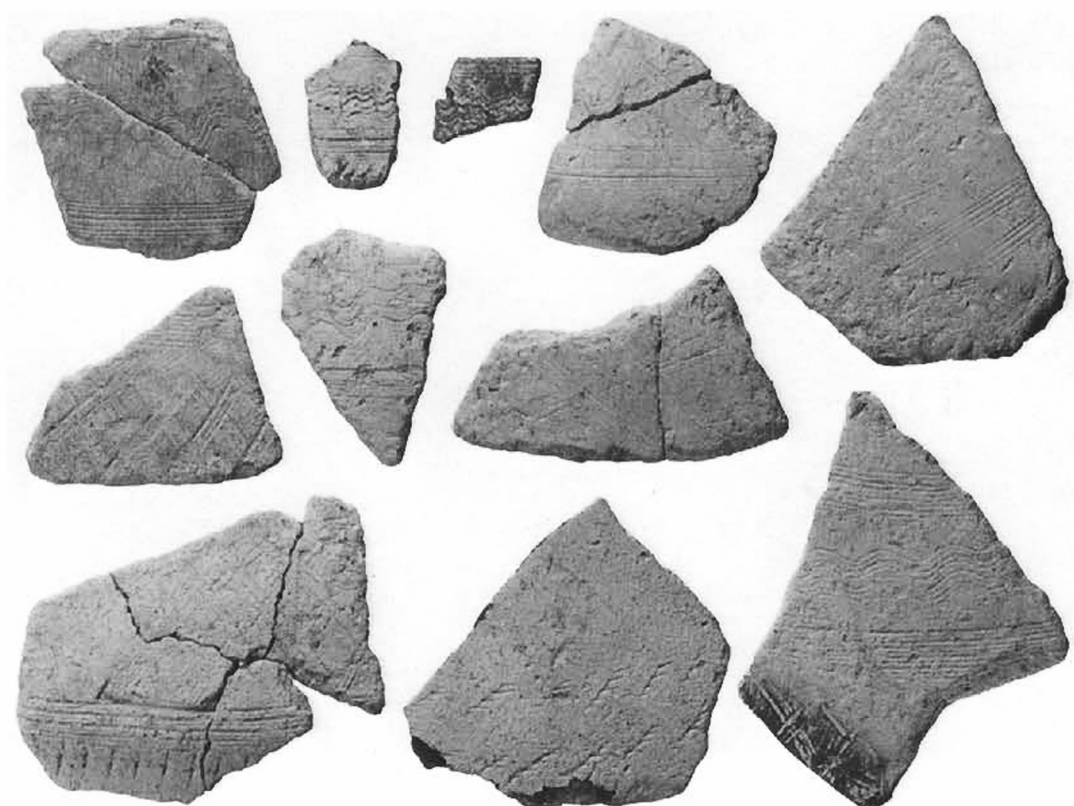


1号墳

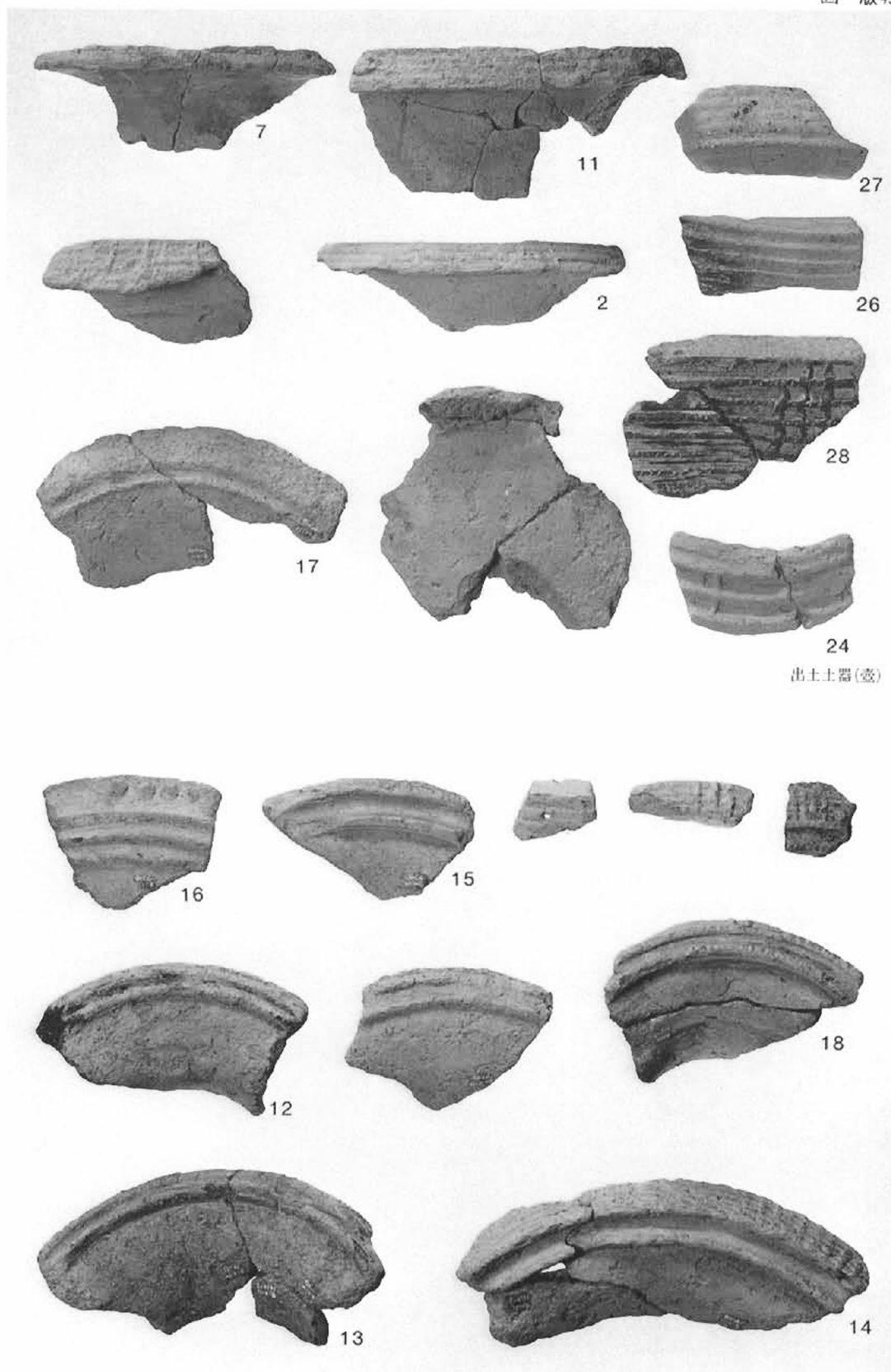




1・2号住居跡出土土器

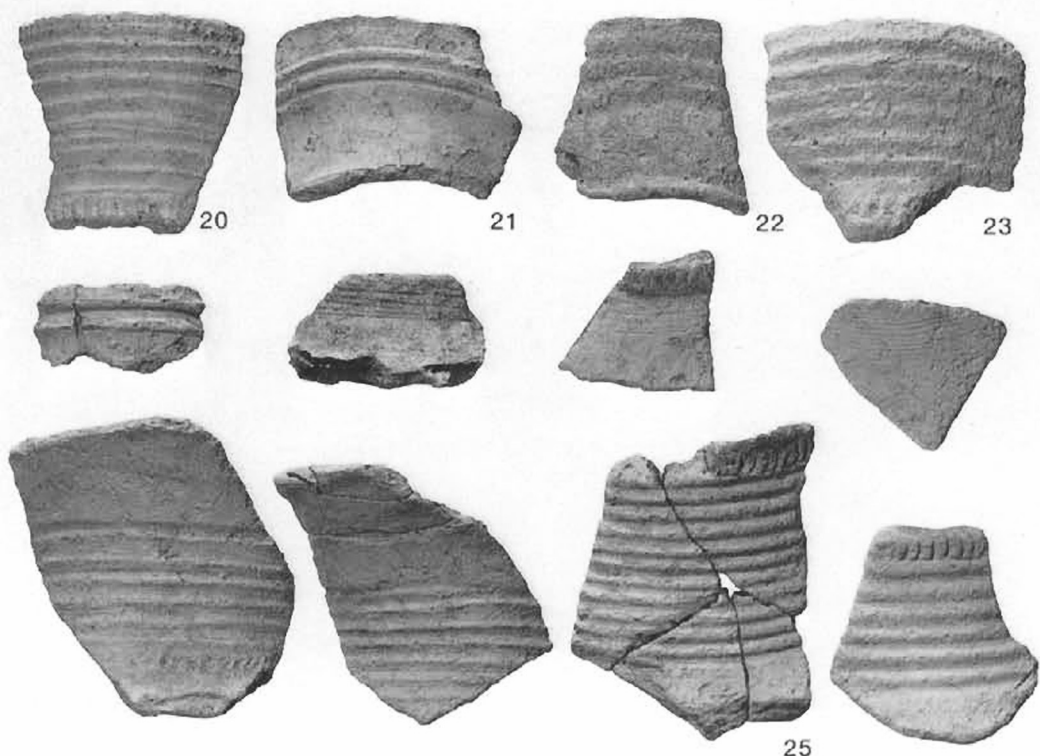


出土土器(壺 文様)

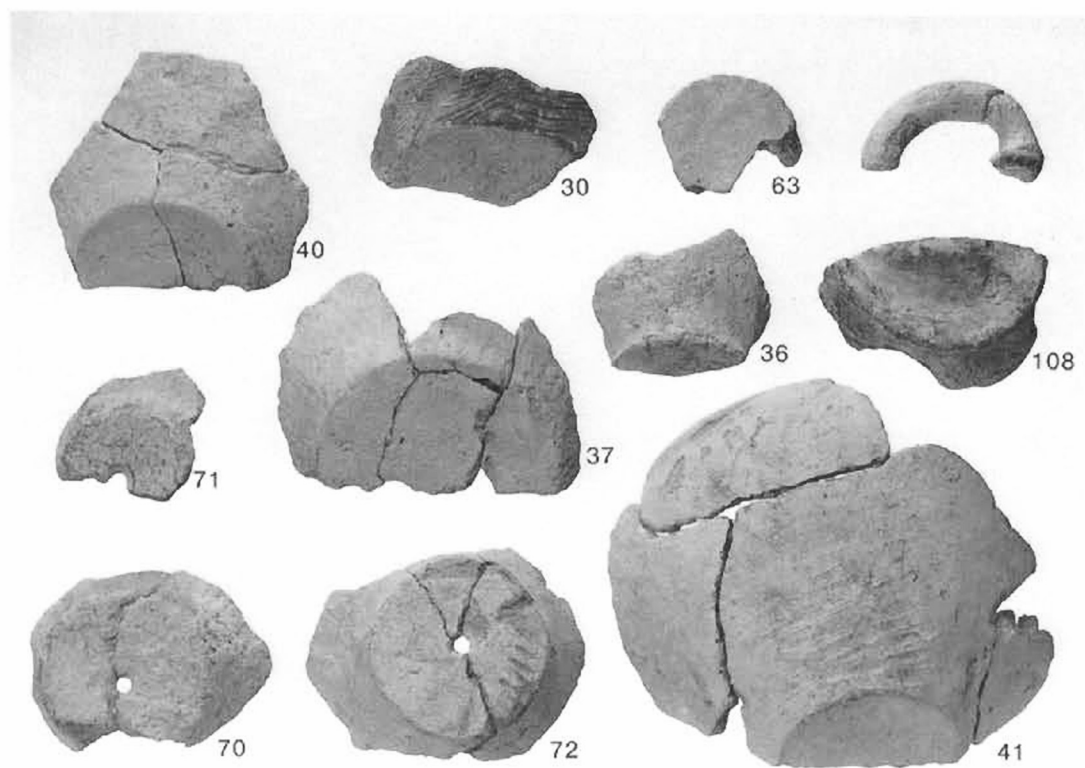


出土土器(壺)

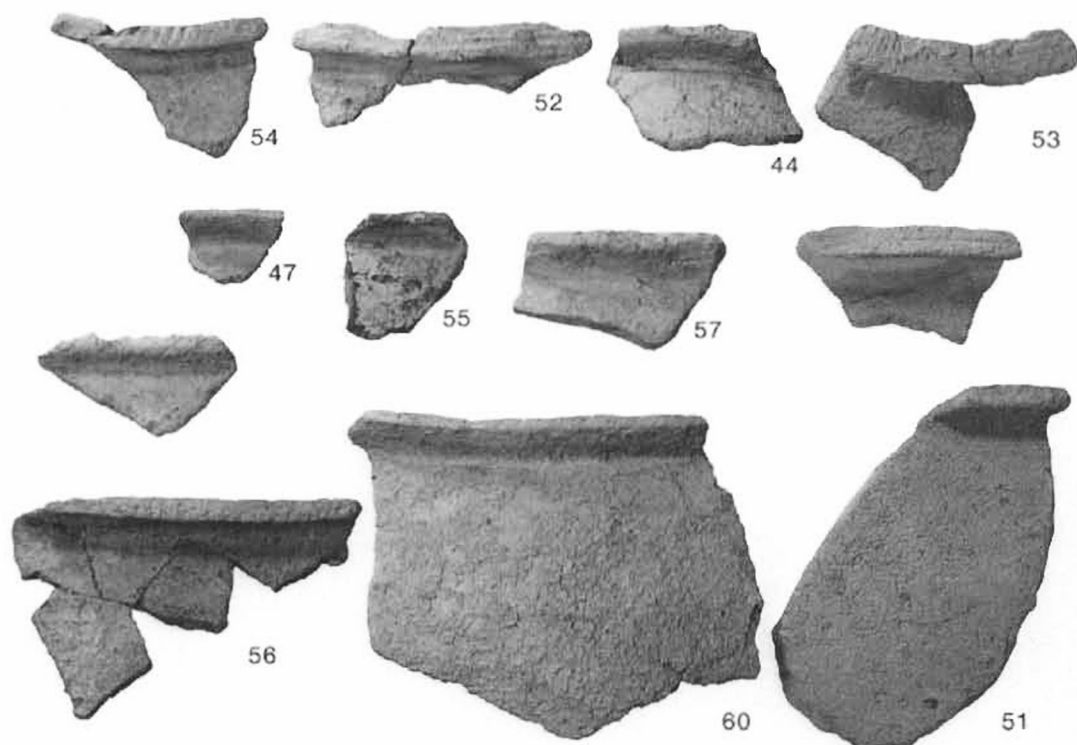
出土土器(壺)



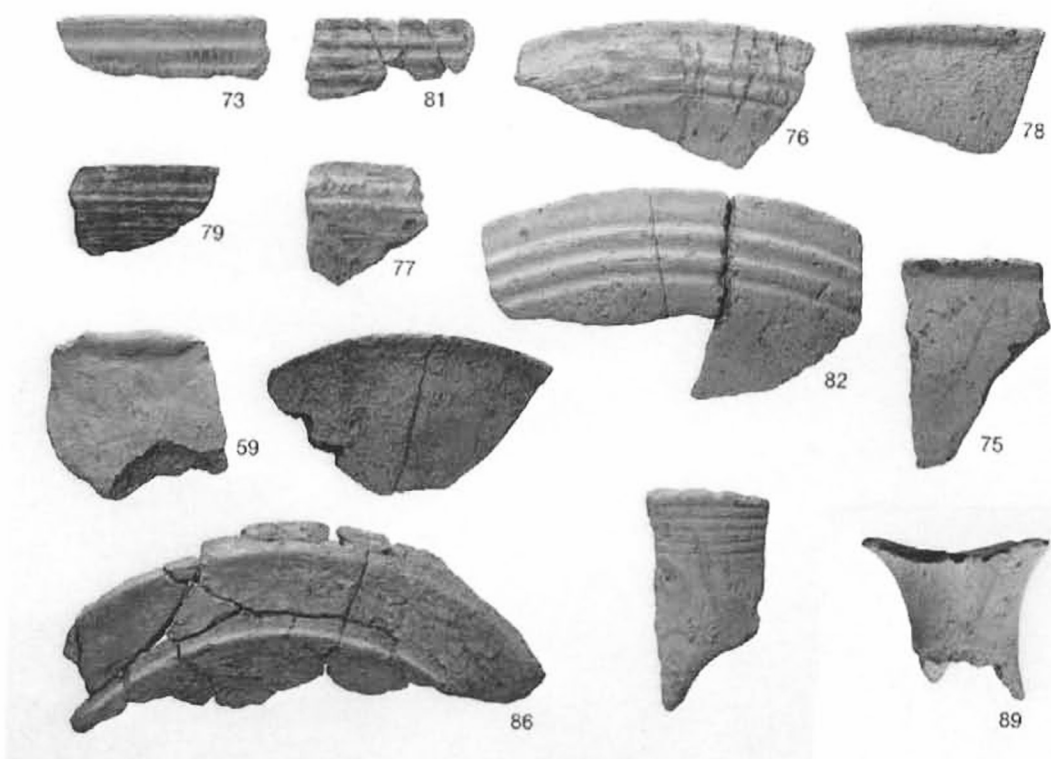
出土土器(壺)



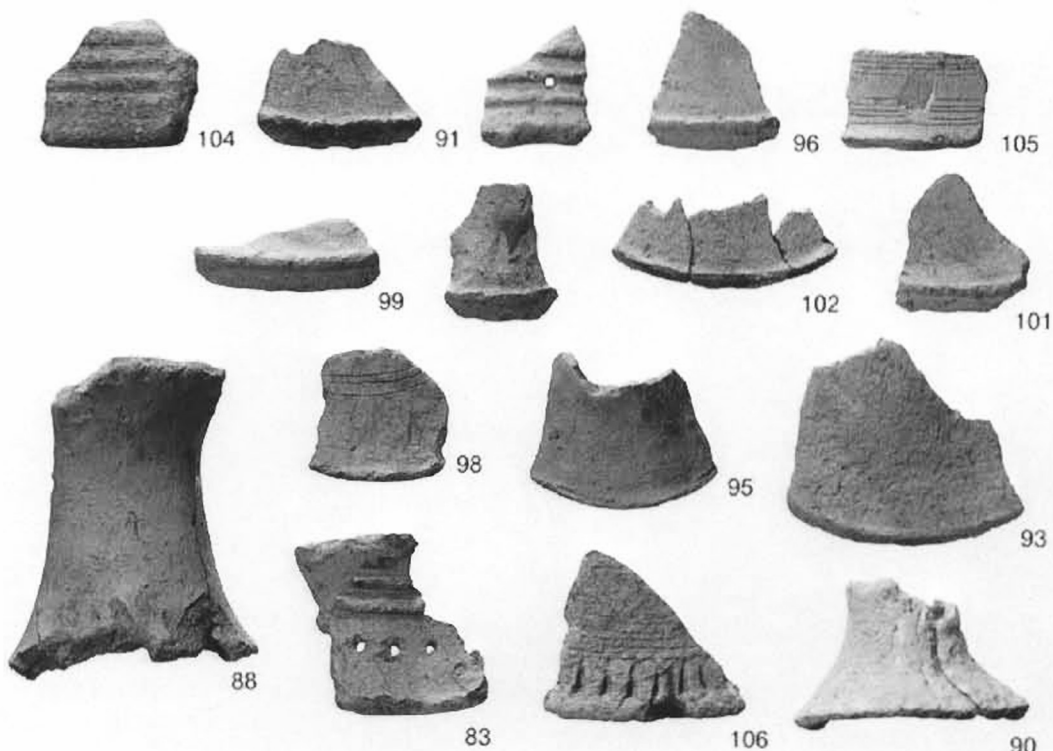
出土土器(底部・把手)



出土土器(壺)



出土土器(鉢・高杯)



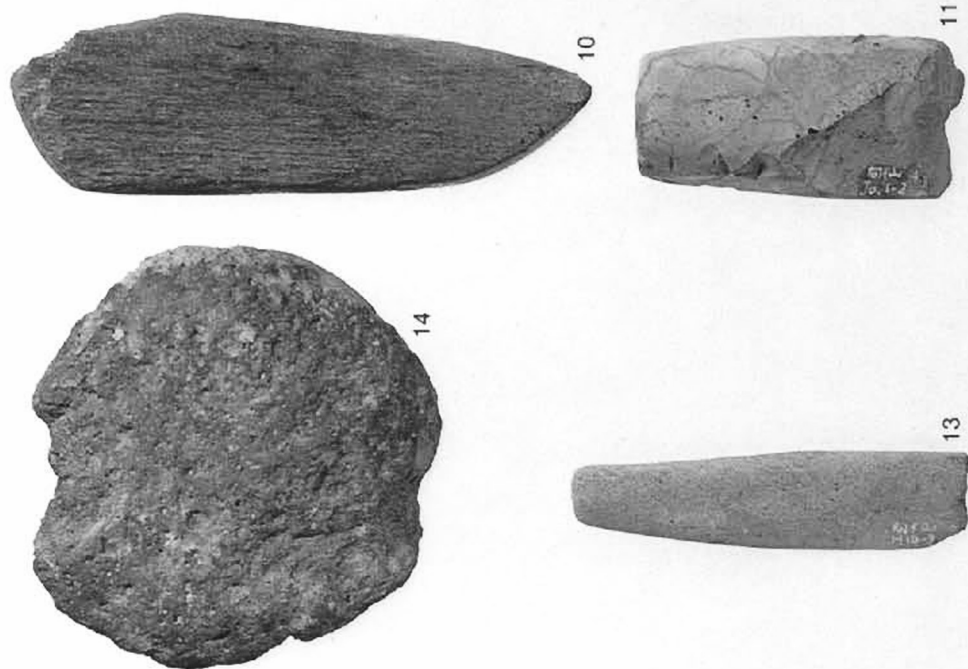
出土土器(脚部・器台)



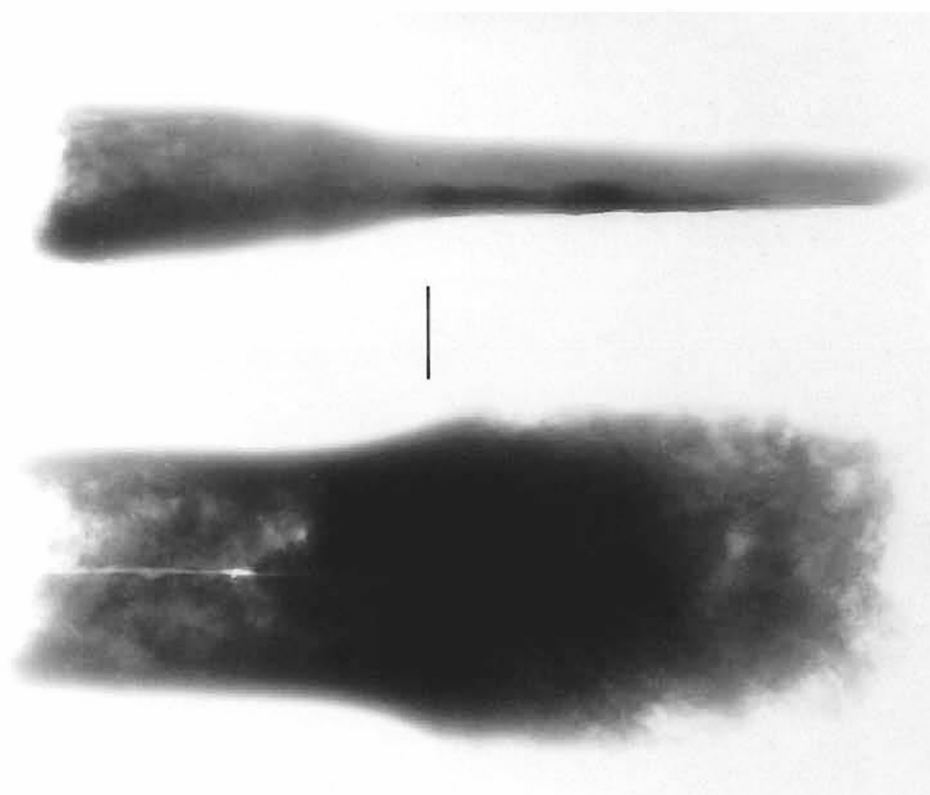
出土石器



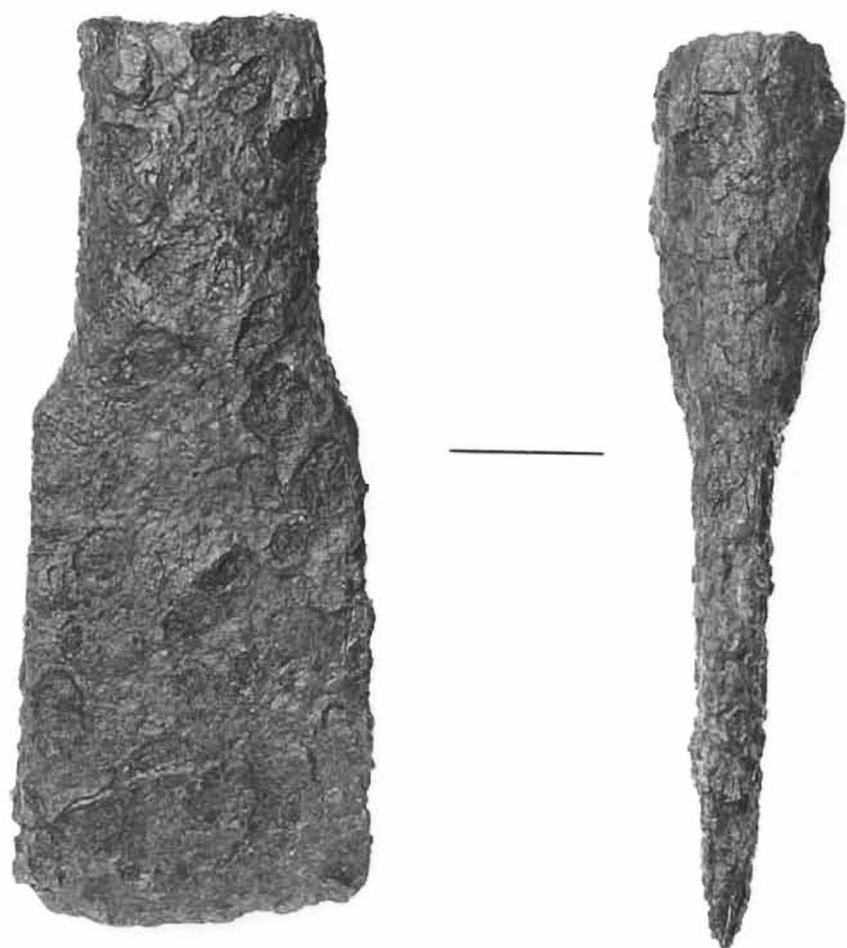
溝状遺構出土玉



出土石器



溝状遺構出土鉄斧 (X線写真)



鉄斧



刀子・剣



1



9



7



14



2



15



6



16



8



4



3



21



10



23



17



12



18



13



22



5



11



24



19



25



29



33



26



35



34



32



30



37



31



38



27



36



28



39

出土土器





52



57



54



58



55



56



60

出土土器